



私は左手で引き金を引いた



私は口の中に紙くずを突っ込まれながら、拳銃を突きつけられている。セーラー服を着た女の子が拳銃を持っていることには違和感を覚えないけれど、拳銃を突きつけている同級生がニタニタ笑っていることにはとても強い違和感を覚えた。

私は五人の女の子達に囲まれている。皆同じ中学二年生。薄暗い教室には私達以外誰もいない。ただ、ニタニタ笑っている女の子達と、よだれをたらし続ける私と拳銃だけが存在している。とても意味のない空間。

「おい優菜。お前、愛が自殺したこと私達のせいにしてるだろ。マジ頭おかしいんじゃないの？
愛はただ死にたいから死んだだけだろ。死にたい奴は勝手に死ねばいいし悪い事じゃない。どうして私らのせいにするの？」

里奈はそう言って拳銃を私のまぶたにおしつけてきた。自分の口からよだれが垂れて里奈の靴に落ちた。

「うわっ。こいつマジきたねえ！」

里奈はそう叫ぶと、仲間からカッターを受け取り私の唇にあてた。逃げようとしても、四人に押さえつけられているから動くことが出来ない。

里奈はカッターの刃先で、私の唇を刺した。

激痛が走り唇から血がだらだらと垂れてきた。もう面倒くさいからこのまま殺して欲しい。

里奈は私の口から紙くずを取り出した。丸められてよだれでぐしゃぐしゃになった紙くずが床に落ちる。よだれが顎をつたっていく。気持ち悪い。

「なあ優菜。愛は生きる事が面倒だから死んだって言いなさいよ。人の死を人のせいにしなさい。人には平等に死ぬ権利があるんだよ」

「じゃあ、人には人を自殺にまで追い込むほどの権利があるの？」

里奈は狐のようにつりあがった目で私をギロリと睨んできた。

「だーかーら。あいつはいじめられた程度で死ぬくらいの気持ちしか持ってなかったんだよ。だから死んだ。もともと生きる気力がなかったんだ」

「何それ。ていうか、そんな事言うって事は自分がいじめてそれに愛が耐えられなくて死んだって認めているようなものじゃない。どんな理由があっても人を殺す事を正当化出来ると思わないでよ。このブス」

里奈は拳銃を私の口に突っ込んだ。冷たい鉄の感触。心臓が止まるかと思った。私はビビってるのか？

「うるさいってば！ほんつとに迷惑なのよ。愛が死んだせいで私はまわりから冷たい目で見られるしさ。私は悪く無い。愛は生きたいと思うなら拳銃持ってでも抵抗すればよかったじゃん。あいつは弱いから死んだ。それだけ」

私はもう我慢の限界だった。一人の人間が集団でいじめられて勝てるわけがない。人は一人じゃ無力で、集団の前ではどうすることもできない。そんなの里奈だって分かっているはず。だから、今だって私一人を五人がかりでいじめている。拳銃を持っていても結局一人じゃ何も出来ないんだ。

「謝れよ。愛が死んだ事を私達のせいにしてすみませんでしたって」

私は口の中に目一杯唾液をためて、里奈の目に向かって思い切り唾を吐いた。里奈が奇声を上げながら目をおさえる。とりまきの四人が私の体を解放して里奈の体をさする。

「おい優菜！ お前ふざけんなよ！」

とりまきの一人が叫んだけど、私は怯まずに里奈の拳銃を奪い取り、構えた。

手下たちは私の目の前で立ち止まった。自分の手が震えている事に気がついた。でも、もう我慢出来ない。

私は里奈の髪の毛を思い切りつかんで窓際までひっぱった。

「ちょっと。止めてよ！」

里奈は手を振り回して抵抗してきた。拳が顔面に当たる。手下の四人が私を後ろから引っ張ってくるけど、腕がちぎれるほど力を入れて、私は手下の四人を殴って払いのけた。

そして拳銃を口にくわえながら、これが人生最後のフルパワーだ！ とばかりに力をふりしぼり里奈を持ち上げた。窓は丁度開いている。里奈は窓枠にのしかかる状態になり、体の上半身が外に出ている。

「あらあら。だらしない。パンツ丸見えだよ、里奈ちゃん」

「おい優菜！ お前何してるんだよ。人殺す気？」

と、手下の佐々木が言った。

「アンタ達だって人殺したじゃない！」

「だ、だから私らは愛をいじめていたけど殺してはいないって。愛は自分で自分を撃って死んだんだ。愛を殺したのは愛だよ。法律的にも自殺以外にはありえないよ」

「幼稚な事言ってるなよ。人を死においやるアンタ達みたいな人が沢山いることが大問題なんだよっ」

拳銃って何よ。政府はただ殺すため死ぬためのおもちゃをばらまいただけなんだ。愛が死んだのは里奈たちのせいだけど、政治家達のせいでもある。世の中には人をゴミとしか思わずあっさり人を殺すやつなんて沢山いるんだ。そんな世の中に拳銃をばらまいたら、死にたいと思っている人は誰かに助けてもらう前に死を選んでしまう。

こんなものがあるから！

私は抵抗し続ける里奈の背中に銃口を当てた。そして撃鉄を起こした。里奈の動きがとまる。

私は引き金を引こうとした。

でも、とりまきの連中が唾を飛ばしながらヒステリックな声をあげて拳銃を奪おうとしてくる。もうどうにでもなれと思って無我夢中で引き金を引いた。

ドン！ という凄まじい音が耳に響いた。永遠かと思われるほどの静けさが教室を支配している。私は目をつむっていた。

目を開くと、私の右手は授業中に元気よく手を挙げる生徒のように天井へと上がっていた。天井には穴が開いていた。

今だ。私は里奈のケツを思い切り押した。あっさりと里奈は落ちた。

里奈は声を発することもせず、グラウンドへと落ちていった。とりまきたちは何が起きたか分

からないといった顔で、ただ目を大きく見開いて落ちていく里奈を見ていた。

私は里奈が地面に落下する瞬間を見届けないまま拳銃を床に放り投げて教室から飛び出した。手下達が悲鳴を上げている。

あいつらは愛をいじめて苦しませ、自殺へと追い込んだ。人を死に追いやる人間に生きる価値も生きる事に対して意見を言う権利はない。

人を傷つけることは絶対にダメだけど、時と場合によるってことが良くわかった。

私はコンビニのATMで全財産を降ろして財布に突っ込んだ。私は里奈を窓から突き落とした。二階から落ちたくらいじゃ死にはしないだろうけど、もう学校には行けないだろう。学校に通えない状況という事は家にも居られないと言う事だ。でも大丈夫。私は私の意志で自分の居場所を全て抹消した。

それに学校なんてもう通う気はなかった。私の唯一の親友である羽島愛は、里奈のグループに壮絶ないじめをされて自殺した。愛が死んだという事実を理解するのは無理だ。いじめられて自殺しました。はい終わり。そんなの納得できない。

愛はおとなしくて自己主張しないタイプ。何を言われても何をされても言い返さないしやり返さない。そこに里奈たちはつけこみ、中一の秋ごろからいじめを始めた。愛の鞆を窓から投げたりボールペンで手のひらをぐさりと刺したり愛のジャージをライターで燃やしたり。

こんないじめの実態を大人達に言ったところで、「信じたくありません」とか「さすがにそこまでのいじめはありえないでしょ?」とか「事実と証言は違うかもしれない」とか言うんだらうけど、本当なんだからしょうがない。この旭岡中学には愛以外にもいじめられている人は沢山いる。私はこの中学に一年と少し通って、実際にいじめを目の前で見てるんだからさ。

愛は何もしていない。それなのにあんないじめをされて、耐えられなくて死んだ。大人達はわかってないかもしれないけど、子供は生きていたくてしょうがないのに、生きる事が絶望でしかないから死んでしまうんだ。決して生きる事が面倒だから死ぬわけじゃない。

学校の対応はサイアクだった。昔から学生が自殺をすると必ず学校が記者会見をして謝罪をするけど、だいたい出てくる言葉は「事実を確認中」とか「いじめがあつたという事実は確認出来なかった」とか「悪口などはあつたらしいが、暴力は確認できなかった」とかそんなもん。どう考えても言葉に出すほどの恐ろしいほどのいじめのせいで自殺しているのに、学校は隠蔽する。

いじめはよくない！ って大人は騒ぐくせに、実際に目の前でいじめがあると自分の立場のために必死にいじめを隠す。そしてどんなに凶悪ないじめがあっても、子供はそんな事をしないと無理やり信じて、真実を嘘と決め付ける。一体いつまで子供に純粹でいてほしいというイメージを植えつけている気なのだろう。

腐ってる。愛があまりにも報われない。理不尽にいじめられ、自分を守ってくれるはずの学校はいじめを隠した。それじゃあいじめた者の勝ちみたいじゃないか。愛の気持ちはどうしてくれるんだ。

そう思うと私は学校に通う気が完全に失せた。人を死に追いやる人間が普通に笑顔で友達と話していて、自殺した子供の存在を無かった事にする学校に行く価値がどこにある？

もう学校は学校としての価値を失っている。そんな事を言えば大人は教育のせいだと言い張る

けど、教育のレベルが低いと子供のトラブルが増えるとかそんな議論バカげている。

何故、人を殺すような人間に育つ世の中なのだろうか？ 根本的な問題はそういう人間に育ってしまう世の中そのものにある。

私は道路に落ちている小石を蹴った。学校も、大人のエゴで支配されている世の中も何もかも意味がない。もうあんな世界で過ごす必要はない。学校に通うくらいなら、小石を蹴って人が転ばないように道の端っこにおいやる方が建設的で意味がある。

日本という国は、今年から拳銃の使用が合法になった。二十歳の以上の人間は審査を受け許可をもらえば拳銃を持てるようになる。当然、使用理由は護身のため。

もう、日本は拳銃でも持たないと自分の命を守れない国になっていた。学校ではいじめで死んでいく子供達が後を絶たなくて、変態教師が増えていき、世の中全体を見ても理不尽な理由で殺されていく人間はどんどん増えていく。

どうしたら犯罪が減るのだろうか？ という議論をしている余裕なんてもうなかったのだ。死にたくなければ拳銃持って身を守る。それしか道はなかった。誰にでも、ある日突然死ぬ可能性はある。愛のように、自分から死を選んでしまう人もいる。

里奈の持っていた拳銃は、親から盗んだものだと思う。愛も親の拳銃で自分を撃って死んでいった。

当然、人間が自分の身を守るためだけに拳銃を使う事はなかった。里奈はいじめの道具。愛は死ぬための道具。拳銃を合法化したって意味はなかったんだ。

拳銃もダメ。じゃあどうやって自分を守ればいいのか？ それに私達子供は拳銃を持ってない。学校で愛みたいな子はどうやって自分を守ればいいのか？

私は空を見上げた。太陽が無駄に頑張っけてエネルギーを私にぶつけてくる。札幌もそろそろ夏真っ盛りになろうとしている。夏と言えばお祭りに花火に海にアイス。でも、私は口の中に紙くず。そして突きつけられる拳銃。窓から落ちた里奈。一ヶ月前に死んだ親友の愛。

青春なんて言葉、死ぬほど嫌いだ。

さて。これからどうしよう。人を窓から突き落としたわけだし、このままふらふらしているわけにもいかない。

家に服とかとりに行きたいけど、もう私は学校も家も捨てる覚悟でいる。どこにも戻りたくない。

色々考えていたら死ぬまで私は頭の中で愛のことを考えてしまう。どこか居場所がほしい。でも私に居場所はない。死を招く場所、学校。離婚して母親しかいなくて、その母親は私をゴキブリでも見るかのような目で見ってくる家。笑っちゃおうよ。

夕方の札幌の街並みはとても騒がしくて、腹が立つ。何より不安でしょうがない。この大きな街で私はたった一人。

私はなんとなくススキノの方へ向かった。頭のすみっこに、もう体を売るしかないのかな？ っという考えがあったかもしれない。まだ体験した事ないけど。

ススキノまで行くと、もう外は暗くなっていた。さっきまでは不安だったけど、何故か夜になると私の心は少し落ち着いた。

夜空にはまんまるの月が浮いている。月明かりの下にいる自分にとってはとても小さな存在なんだろうけど、だからこそ心が穏やかになる。

まあ、銀色のお月様に思いをはせたところで、なんにもならないんだけど。

ススキノに来て何をするでもなく、ただ無意味に歩き回った。そのうちどんどん外れた道に行き、人気の無い所に出た。さびれたスナックや、明治や昭和時代から生き残っているようなボロい民家がぽつんぽつんと建ち並んでいる。

さっきまでいた繁華街と比べると雲泥の差。

こんな寂れた所にいると怖くてしょうがないと思って街の中心部に戻ろうとした時、民家の横で何かが蠢いているのに気づいた。闇を携帯のライトで照らすと、電気のついてない民家の小さな庭に人間がいた。暗くてよくわかんないけど、多分男。しゃがみこんでもそもそ動いてる。

私はひきつけられるようにしてその男に近づいた。男は私に気づくとガバッと首をこちらに向けた。生気をなくした瞳が私の顔をじっと見つめる。私はつい顔をそむけた。知らない男に見つめられるなんて気持ち悪い。

「誰だ、お前？」

「え？ あ、いや」

ど、どうしよう？ こんな怪しいヤツに近寄るんじゃないよ。

「俺に何か用？」

男は、手のひらの上で何やら錠剤みたいなものを砕いている。嫌な予感がした。

その時、なんだかゾクツとした。男の視線が私の太ももに向いている。気持ち悪くてこいつの目を蹴って潰したくなった。

「見ないでよ。変態」

「セーラー服着て、しかもスカート短くしてるお前が悪い。見てくれって言ってるようなもんだろう」

それは男が女の体を見たいがために言う究極の言い訳だ。誰も変態に見せるために短くしてるんじゃない。

「なあ、お前、中学生だよな。夜にススキノで何してんの。家出？」

「アンタに関係ないでしょ。……ていうか、アンタ、何してんの。その薬は何？」

彼は錠剤を砕くと、投げやりに言った。

「タマだよ、タマ」

「タマ？」

「覚醒剤さ」

私は一瞬何を言っているのかわからなかった。覚醒剤？ 嘘でしょ？

「お前もやるか？」

「いや、私は薬はやらないから。ていうか、それマジで薬？」

「そうだよ。お前にも分けてあげるよ」

「私は薬なんてやらない」

「え、なんで？」

薬男は、あたかも私がバカな女かのような目で見てきた。薬をやらない事に対してなんで？と言われる筋合いはない。人間はどいつもこいつも理不尽だ。

男は立ち上がって私の顔をじっと見た。冷たい風が吹き、男は「寒いな」と呟いた。

「ねえ、なんでアンタ薬やってるの。頭イカれるだけでしょ」

「イカれるのが楽しいんだよ」

「いっつもやってるの？」

彼は首を横にふった。

「最近やり始めた。たまーに吸う。まだ末期じゃない」

色んな意味でアンタは末期だけどね。

ていうか、私はどうしてこんな危ないやつと話しているんだろう？

「とにかく気持ち良いんだ。薬をやれば一瞬でも嫌な事を忘れられる。俺さ、死にたいんだ。もう生きる事が辛くてさ。薬をやらないと生きていけない。……つっても、薬なんかそんなに買えないけどなあ」

私はその言葉を聞いて、笑いを堪えることが出来なかった。おかしい。笑いが止まらない。一度笑うと笑いは止まらず、狂ったように私は笑いまくった。

「おい、お前。大丈夫か。頭おかしいんじゃないのか」

「おかしいのはアンタよ」

「は？」

まだ笑いは止まらない。彼は私をギロリと睨んでくる。

「だって、アンタ、死にたいんでしょ？ 生きる事が辛いんでしょ？ じゃあ死ねばいいじゃない。死にたくてしょうがないのに、薬をやって嫌な事を忘れるなんて矛盾してる。おかしいよ」

彼は「うるせえ！」と叫ぶと、突然こっちに走ってきて私の胸ぐらをつかんだ。胸にやせ細った手があたる。

「喧嘩売ってるのか？ 俺の何が矛盾してるんだ！」

「だーかーら。貴方は死にたいんだよね。生きる事が辛いんだよね。でも本音は死にたくないんだよ。だから覚醒剤という手段を使ってでも生きようとしてる。結局死にたいほど辛いけど本当に死ぬのは怖い。だから薬に溺れてる。バカじゃないの？」

男は私を睨むと、胸をわしづかんでから突き飛ばしてきた。私は地面にしりもちをついた。でも、怒りも憎しみも浮かんでこなかった。理不尽な事には慣れているから。

大地は「しまった」というような顔をした。でも私は気にせずに、言ってやった。

「薬なんかやっても根本的な解決にはならないんだよ。そんな事もわからないの？」

「お、俺は根本的とか本質的とかプライドとかそんなのどうでもいいんだ。そんな事言っていたらキリがない。その時の快樂さえあればいいんだよ」

彼はそう言うと黙りこくった。砕けた薬を小さな袋に入れてポケットにしまう。

しばらく沈黙が続き私の頭は冷静になってきた。なんでこんな初対面の男とマジになって話しているんだろう？ バカみたい。私はとっくのとうに頭イカレちゃってるのかな。

私は立ち上がり、スカートのポケットからセブンスターを取り出して一本口にくわえた。ライターで火をつけて一口吸う。

男の顔をよく見てみた。目は細くてキツイ。結構中性的な顔。肌は白い。服はTシャツにジーパン。短髪。黒い鞆が男の横に置いてある。

彼は、とっさに私を突き飛ばしたことに罪悪感でも覚えたのか、申し訳なさそうに私を見ている。

呆れた。人を突き飛ばしたくらいで、すぐに後ろめたい気持ちになるなんて。弱気っていうかなんていうか。

「アンタ、何歳？」

なんとなくそう聞いてみた。何故か、この場から離れる気が起きなかった。

大地は意表をつかれたような顔になると、自分の両手をじっと見つめた。

「ねえ、何歳なの？」

「じゅ、十四だよ。お前は？」

「私も十四歳」

彼は特にリアクションをしめさずに、ただ小さく「ふうん」と呟いた。

「何、いきなり静かになってるの」

「あ、いや」

「短気な奴は見慣れてるからいいよ」

「あ、うん。わりい。俺、ちよつと薬で頭変になってた。ごめん、急に突き飛ばして……」

「いいよ別に。ていうか、同い年じゃん」

「あ、うん。どこの中学？」

「旭岡。アンタは？」

「夕野中学。でも俺、学校行ってないから。世間的に言えば不登校。あ、ちなみに名前は茂師理大地(もしりだいち)。お前の名前は？」

「西孤優菜(にしこゆうな)」

「優菜か。……タバコ、俺にも一本くれ」

私はセブンスターとライターを大地に放り投げた。大地は火をつけてゆっくりと紫色の煙を吐いた。

「ねえ、アンタは家出？」

私がそう聞くと、大地は私の顔や胸や太ももを舐めるように見てきた。なんかもう面倒になってきて、私は地面に座ってわざと片膝をついてパンツを丸見えにした。大地はニヤリと笑った。男の脳細胞は多分一つか二つくらいしか無いんだろうなあ。

「まあ、家出かな」

大地はパンツに向かってそう言った。

「どこで生活してるの？」

「たまにネットカフェ」

「たまに？」

「家出してから一ヶ月くらい経つんだけど、ネットカフェに泊ったのは数えるほどだよ」

大地はそう言うと、私の顔をじっと見ながらぼそりと言った。

「俺の秘密基地来ない？」

「は？」

「厚別区の住宅地の外れに小さい森があるんだ。その森の外れにオンボロの小屋があっけさ。そこで生活してるんだ。ボロいけど、中は結構広いぜ」

「……そんな小屋本当にあるの？」

「あるんだよ。元々は多分物置とかだったんだろうけど、今は使われていない。なあ、優菜。俺の小屋に来ない？ どうせこの後行くアテないんだろ？」

「何それ。ナンパ？ 言うておくけど、私はお金あげないし体もあげないよ」

大地は大きな声で笑うと、言った。

「そんな見返りはいらんよ。ただ、女が俺の秘密基地に来てくれるだけでも十分だ。それに一人にいるのにも飽きた。……今突き飛ばしたお詫びもしたいし」

結局、こいつは生きていたくてしょうがないんだ。どういう理由や過去があっけ死にたいと思ってるのか知らないけど、一人で寂しいから女を誘うなんて、生きたいという願望が見え見え。こういうネチネチしたヤツはあまり好きじゃない。

でも、確かに行くアテはない。小屋がどの程度ボロいのか分からないけど、とりあえず寝る場所さえ確保出来れば良い。毎日タダで泊まれる場所があれば、なんとか一人でも生活出来そう。いや、二人で生活する事になるのか。

それに、こいつは覚醒剤をやっている。という事は、薬を買うほどのお金があるということだよな。だったら、私は女という存在を小屋に置くという見返りを与える代わりに、家と食べ物を与えてもらおうかな。

でも。それでいいのかな。いや、いいはずだ。私に居場所なんてない。学校は私の居場所じゃない。

「ねえ。学校生活は学校で送るものだと思う？」

私は聞いてみた。絶対変な顔されると思ったけど、大地は意外にも当たり前のような顔をした。

「学校生活が学校という場所じゃないとダメだなんて理由ないと思うよ？ 大事なのは、俺達子供が一番安心して、自分の居場所だと思える場所を見つけることだ。俺達が学校と思った所が、学校なんだよ」

大地は私の欲しい言葉を言ってくれた。そうだよな。学校と認められているところで送る生活だけが学校生活じゃない。

だってくだらないもん。世の中はくだらない。

くだらない話で笑い合うガキども。くだらないバラエティ番組。嘘くさい笑いを浮かべる芸能人。建前ばかりの人間関係。何の価値もない大人が偉そうな顔を出来るように存在する縦社会

。たった三年間の付き合いをうまく過ごすための愛想笑い。

死へと向かっているどうでもいい自分の命。どれもこれもくだらない。

でも、誰かに分かってほしいことがあるんだ。私まだ十四歳なわけよ。やっぱり、なんていうか、そういう年頃なの。

だからといたら変だけど、私は私なりに、私だけの学園生活を探してみようと思う。

もう、普通の生活には戻れないし普通はほしくないしまずこの世の中が普通じゃない。

「アンタと一緒にいれば、新しい学校生活送れるの？」

大地は目をパチパチさせて私の顔をまじまじと見つめてきた。そして、ニコリと笑った。

「当たり前じゃん！ まともな生活とか、楽しい学校生活とか、輝く青春とか、そんなの他の奴らが勝手にやっていたらいい。俺達は、もっと他のやり方で生きていけるはずだよ」

大地は勢いよく立ち上がった。そして黒い鞆をひつつかむとさっさと歩き出した。

「地下鉄で行くぞ。大丈夫、交通費は全部俺が出すから」

地下鉄東豊線の豊水すすきの駅から大通りに行き、東西線に乗り換えて大谷地駅まで行った。夜の地下鉄は人気がなく寂しかった。

駅前から二十分ほどあるくと、閑静な住宅地に出た。電灯と家から漏れる光はなんだか頼りない。

そして更に奥まで行くと行き止まりにぶつかった。そこには森しかない。大地は森の中へとずんずん入って行く。

夜の森は本当に怖かった。でも引き返す気はさらさらなかった。

少し歩くと、大地の言うとおりの森の外れにぽつんとボロい小屋があった。大きさは普通の家にある物置を四つ分にしたくらいかな。

ところどころ木が腐っているけど、今は夏だし、別に問題ないかな。住宅地の近くだから虫もあんまりいないし。生活してみないと分からないけど、ギリギリ許せるレベル。

「なかなか趣のある校舎ね」

「住めば都さ。人間楽しもうと思えばどこでも楽しめる。でも、それは自分が自由な立場にいること前提なのさ。お前は今日から自由になったんだから、どこでも楽園さ。自分が楽園だと思えばね」

「じゃあ、自由な私は、今学校に戻ったら楽園生活を送れるの？」

大地は頭をぼりぼりと掻いた。

「学校は自由を奪う所だろ？ あー、もう。これ以上クサイ台詞言わせるなよ。そういうことは尾崎豊にでも聞いてくれ」

「古いわね」

大地は小屋の扉を開けた。ギシギシと耳に響く嫌な音を立てて扉が開く。小屋の中はまっくら。

中に入ると、大地は小屋に置いてあった懐中電灯で中を照らした。小屋の中には物が溢れていた。雑誌、ラジカセ、寝袋、携帯テレビなどなど。娯楽品から生活する上で必要なものが揃っている。

こいつ、マジでここで暮らしてんの？ 嘘みたい。あ、でも私だって今日からここで生活しようとしてるんだもんね。

「寝袋は一つしかないから、とりあえず俺の使えよ」

「嫌。なんで男の入った寝袋で寝なきゃなんないの」

大地は露骨に面倒くさそうな顔をしながら頭をボリボリと掻いた。

「わかったよ。明日寝袋買うから、今日は地べたで我慢して。……それで、この部屋で住む気にはなった？」

私は一応考えた。愛を殺した殺人鬼のいる学校にはもう永遠に行く事はないだろう。でも学校に行かずに家で引きこもりをするわけにもいかない。私は別にそれでもいいけど、親がうるさい。それに引きこもってもつまらない。

つい笑ってしまう。それって、刺激が欲しいってこと？ 引きこもって毎日を退屈に過ごす

より、この会ったばかりの男とこの小屋で過ごすという刺激を求めるのか、私は。

でも、いいや。引きこもりよりはマシだ。それに色々なものが揃っているし、こいつとすればお金には苦労しないだろう。世の中金。金が全て。

「大丈夫。お世話になるよ」

「よし決まった！ 今日からよろしくな」

大地は満面の笑みを浮かべると、床に座りお菓子とカロリーメイトを段ボールの中からとりだした。

「今日はこれしかないけど、我慢して」

私はこの時やっとお腹がすいている事に気がついた。

「食べられるなら何でもいい」

私はポテトチップスの袋を開けて、何枚も何枚も口に放り込んだ。大地が鞆から水のペットボトルを取り出して渡してきた。

「さっき買ったんだ。ぬるいけど、飲めよ」

「ありがとう。……ねえ、アンタ。お金どうしてるの？ なんでこんなに物があるのよ。親から金盗んでるの？」

「まあ、家出する時はかなりの金を盗んできたよ。人生金が全て。金があれば子供だって一人で生活出来る」

世の中金が全てだというのには納得出来るけど、子供一人でも生活出来るというのには納得できない。

「それはどうだろう？ 子供一人でも生活出来るって言うけどさ、結局その金は親の金でしょ？」

アンタ一人の力でどうにかしてる訳ではないでしょ。家だって、中学生が一人で不動産に行ってもしょうがないよね？ 世の中契約で成り立ってるけど、私達子供はどんな契約も出来ないんだよ。十四歳っていう年齢で出来ることなんか、限界がある。アンタお子様だねえ」

大地はムツとした顔になり、声を荒げて言い返してきた。

「いいんだよ、そんな事！ 俺の手元には金がある。その現実満足する。それでいいじゃないか。親から盗んだ金だろうが何だろうが、どうでもいいんだよ。意味とか理屈なんかクソ食らえだ。とにかく屋根と食いものあれば生きていける。先の事なんか知るかよ」

男って、こういう所が幼稚なんだよねえ。まあ、私だって大地が親から盗んだ金で買ったお菓子を食べてるんだけど。

「……でも、親の金なんかすぐに尽きるでしょ」

「まあな。今の資金源は、アフィリエイトかな。サイト作って商品のリンクページを張りまくって紹介料もらうアレ、知ってるだろ？」

頷く。

「ネットカフェでその作業をちまちまやってる。でも、まあ、一番の資金源は万引きだよ。盗んだ物売るんだ」

「へえ。どんな物盗むの？」

「やっぱゲームだね。でもチェーン店はダメだ。商品をそのまま持って行くと、出口でセンサー

が反応してブザーが鳴るからね。だから個人経営の寂れた所を狙う」

なるほど。それにゲームを売れば結構な金になる。発売されたばかりの七千円のゲームなら、五千円以上で売れる。それを二本でも売れば一万越え。

「捕まらないの？」

私がそう聞くと、大地は自慢げに言った。

「捕まらない。俺はうまいからね。大きな店でやらないし、テクニックには自信ある。それに捕まっても、俺は何も怖くない。学校行ってないんだから学校に報告されてもなんのデメリットはない。親に言われても、親は俺の事もう死んだ事にしてるだろうからやっぱり問題ない。ほら、盗み放題」

それでも何度も捕まれば、いつか大変な目に合うと思うけど……。まあ、それこそ、大地が捕まっても私には大きなデメリットはない。せいぜい、こいつが捕まるまでこの小屋にいさせてもらおう。

と言っても、永遠にこんな生活が出来るわけないって事くらい、私にはわかってる。札幌は冬になると雪が降り死ぬほど寒くなる。真冬にこんな小屋で生活出来るわけない。そして当たり前だけど、何年もここにいられる訳はない。

それにいつか警察に保護されてしまうだろう。表面上は大人に助けられる事になる。結局中学生の私は大人無しでは生きていけないのだろうか。

それならそれで、子供だからまあしょうがないよねって納得出来る。でも、私達を守るべき大人は平気で子供を殺すし変態教師は女の子をいやらしい目で見ってくる。そして色々な規制で私達をしめつけながら子供を守るんだと言い張っている。どんどん住みづらい世の中にしている大人達に守られる意味がわからなかった。

でも、学校を捨てた理由は愛という友達が死んだから。家を捨てた理由は私個人が家にいたくないから。私が全てを捨てると決意した理由に大人は別に関係ない。

よく分からなくなってきた。自分の事と腐った大人全てが嫌になったのか、自分に辛い事があると大人の揚げ足をとって逃げているだけなのか。分からない。でも、大人たちの下で生きるのは嫌。

大地は私の顔をじーっと見つめながら言った。

「なあ優菜。もう寝る？ でもそれはもったいないよな」

「何がどうもったいないの？」

大地はわざとらしく溜息をついた。

「俺達流の修学旅行さ。このままあっさり寝るなんて、頭イカれてるぜ」

大地は私の顔をニタニタ笑いながら見てくる。そして床に転がっているショートピースに火をつけた。両切りタバコを吸うなんて、珍しい。

ぼーっと大地を見ていると、私は突然ハツとした。窓から落ちた里奈。あの後どうなったんだろう。

自暴自棄になりすぎた私は頭がおかしくなっていたらしい。多分神経が麻痺していたんだ。どんどん不安は募り、心が腐り体中の血がドロドロと溶けていきそう。

なんでこいつ、私の目の前にいるの。どうして私は平然とこんな怪しいヤツと小屋で二人きり

でいるの。どうして愛は死んだの？ どうして里奈を窓から落としたの？ なんて誰も私を追ってこないの。

私はこの時やっと携帯を思い出した。こんなおもちゃ、非日常が訪れるとすぐに忘れてしまうような存在なんだ。

携帯を開くと予想通り莫大な数のメールが届いていた。メルアドを教えていないはずの里奈の手下たち。先生。色々な人からメールが来ている。でも親からメールは来てなかった。

怖い。嫌だ。不安だ。もしかして里奈は死んだの？ 私も人殺しになっちゃったの？ 里奈と同罪なの？ わからない。私はとんでもない事をしたのかな。

辛い。苦しい。痛い。いつそ死にたい。

誰かと、喋りたい。

「うん。そうだね。話そう。何話す？」

大地はショートピースを口から話すと、私の口に啜えさせた。とても濃くてちょっと甘い味。好きじゃない。

「なあ優菜。お前って本読むの？」

「本は大好きだよ」

「へえ。どんな本？」

「うーん。一番好きな本は不思議の国のアリスかな」

「そうなんだ。俺は本ぜんぜん読まないから、分かんないけどなあ」

大地の反応は意外だった。こういう奴は本読んでいる人を何故かバカにする。しかも不思議の国のアリスなんて聞いただけで、子どもっぽいつて大笑いする。

でも大地は、本を読まないのにも関わらず本を読む人間をバカにしなかった。私はそれだけで、こいつは完全にイカれた人間ではないのかもしれないとちょっとだけ思った。

「漫画は読む？」

「少女漫画なら読むよ」

「少女漫画はよく知らないな？ ゲームはする？」

「あんまりしない。アンタは？」

「俺は大好き。ゾンビ殺すゲーム知ってるか？」

「あー。一応知ってる。グロいんでしょ」

「まあな。でも、面白いんだ」

私はこの時、暴力的なゲームやエロい描写のある漫画を批判し規制しようとする大人達を思い出した。政治家、PTA、モンスターペアレント。

なんで突然そんなことを思い出したか分からない。夜になると、普段考えないようなことでもぼんぼん頭に浮かんでくる。きっと、心の底にあった不満が真夜中の孤独のせいで這い上がってきたのだろう。

「ねえねえ。そういう暴力的なゲームのせいで犯罪に手染める子供が増えるとか言って、大人達ヒステリー起こしてるじゃない？ それについてどう思う？」

大地は待ってましたと言わんばかりに手をたたき、タバコを床で押しつぶした。私は悔しい気

持ちになった。こいつはこの話がしくて趣味の話をしたんだ。私がいちいちこんな事を聞かなくても、自分から勝手に話し出したに違いない。

自分の話をするのが好きなんだろう。死なんて眼中にないじゃないか。

「そこなんだよ。今お前が言った事がさ、俺の家出とか死にたいと思う願望の大きなテーマなんだ。いいか、優菜」

大地は目をキラキラさせている。バツカみたい。

「例えば、Aくんが暴力的なゲームをして、わあ俺もこのゲームみたいに人を殺してみたいなあと思ったとする。そして実際に道を歩いている見知らぬ人をナイフで刺したとするな。そういう事件が起きたら大人達はなんて言うと思う？」

「まあ、やっぱり暴力的なゲームは青少年に悪影響を与えるから規制すべきだ！ って騒ぐでしょうね」

「そう。大人はそういう事件があると安直に創作物のせいにして騒いで、まるで創作物を規制しまくれば全てが解決すると言いたげな事をだらだらと述べるんだ。でも、それは、違うんだ」

私はポテトチップスを口に放り込んだ。美味しいのかまずいかわからない。

「暴力的なゲームそのものが問題なんじゃない。暴力的なゲームをやる以前に問題はある。どうして、暴力的なゲームをやって影響されて、簡単に犯罪をしてしまう子供に育ったのかっていう所に根本的な問題があるんだよ。普通、暴力的なゲームやったくらいで人殺さないよ。親は、子供に悪影響与える創作物は規制するべきだと言うけど、アンタの子供がまともならどんなゲームやっても犯罪しないから大丈夫だよって言いたい。なあ優菜。俺の親もそうなんだ。俺が暴力的なゲームやったりグロい漫画読んできると、犯罪するような人間に育つからやめなさいって言うんだ。俺、ショックだった。ああ俺の親は、俺のことを、暴力的なゲームとか漫画を持っているだけで、犯罪をしてしまう子供だと思ってるんだなあって思ってさ」

それはまあ、理解できる。自分の親が、自分は簡単に創作に影響されて犯罪をやるんだと思っ

ていたらさすがに引く。
そして日本全体で創作をどんどん締め付けるような事したら、そりゃ私ら子供は大人を疑うよ。頭がイカれてるとしか思えない。

私だって小説も漫画も映画も大好きだ。そういう創作物を規制するような行動は本当にやめてほしい。でも政治家達は、子供の犯罪を創作物のせいにして、創作の規制を厳しくして犯罪を減らしたつもりになろうとしてる。根本的な問題は無視しているくせに。バカみたい。

子供の犯罪はとりあえず創作物のせいですか？ ふざけないでほしい。創作の存在はなんとしてでも守るべきだ。

「俺は、そういう世の中はもうおかしいと思った。今の世の中にしたのは大人だろう。犯罪を平気でするような子供が育つ世の中にしたのは大人だよな？ それなのに、少年少女の犯罪を創作物のせいにして、俺達は子供を守るぜ！ みたいな顔していいのはおかしい。狂ってる。俺はこんな世の中で生きるのは絶対に嫌だ。全てがおかしい」

別にアンタが犯罪しなきゃそれで良いじゃないかと思った。世の中納得出来ない事なんかいくらでもある。口には出さないけど。

愛が死んだ事もそうだし、私が里奈を窓から突き落としたのだって、好きでしたわけじゃない

。もし里奈がとても打ち所が悪くて死んでいても私は気にしないけど、納得はしないと思う。里奈が死んだ事に納得出来ないんじゃないかと、どうして私が里奈を殺すような事をしなくちゃいけないのか、納得出来ない。

大地は言いたい事を言い終えて満足したのか、水を飲んでしばらく黙り込んだ。沈黙は普通気まずいものだけど、今は別に気まずくない。別にこいつとは友達でもなんでもないのだから。

うん、なんていうか、ヒモみたいなもんよね？ こいつは女と二人で過ごせればそれだけで満足なんだろうし、たったそれだけの見返りで私は屋根にも食べものにも困らない。

大地は突然ニヤリと笑った。気持ち悪い。露骨に嫌な顔してやったけど、こいつは気にせずに黒い鞆をごそごとあさりはじめた。

鞆から、黒い物体が出てきた。それは紛れもなく、見慣れた拳銃だった。

呆れた。こいつ、親から金だけじゃなく拳銃も盗んできたのね。日本の頭の足りない政治家は、拳銃なんか合法化したら子供が親から拳銃を盗んで使うという事を想像出来なかったらしい。まあ、政治家のアホさを嘆くのはもう今更よね。政治家は、根本的な解決をする事は出来ない人間達の集まりだし。

「グロック十七だ。有名だから知ってるだろ？」

女の子が拳銃の名前なんて知っているわけないでしょ？ と言いたいところだけど、知ってる。日本じゃ拳銃はもう当たり前なんだから。

さすがにデザートイーグルとかは見た事ないけど、グロック十七は流通量が多いので誰でも知ってる。

拳銃は携帯と同じくらい私達にとって見慣れたものなんだ。

「で、それが何？ 見せつけたいだけ？」

大地はぎこちない笑顔で笑うと、言った。

「ここには拳銃がある。俺達は死のうと思えば一瞬で死ぬ。なあ優菜。俺達、別に無理して生きる必要ないよな。確かに本音を言うと死ぬのは怖いよ。でも、死にたくてしょうがなくなった時は、この拳銃で一発だ。お前が死にたくなったら俺が殺してやる。その逆もアリだ」

何故か、私は大地と同類の人間とみなされていた。私は自分の心を見透かされているようでこわかった。

「何が言いたいのか？ ねえ、やっぱアンタのやってる事は矛盾してるよ。アンタは死にたいんだよね。そして拳銃があるから一発で死ぬんだよね。じゃあ、今死ぬば？」

大地は私の言葉を無視して続けた。

「まあ聞けよ。お前は どう思ってる。死にたい？」

「わからない。死にたいと強く思うことはある。でもね、リストカットをするとか拳銃で自殺したいとかは、あまり思わないの」

多分、希望を探している。いや、探しているっていうのはちよつと違うかな。希望の探し方が分からないんだ。まだ、私は落ちる所まで落ちてないのかもしれない。自分を傷つけて快樂に溺れてみたいとも思うけど、なんだかそんな事をするのはバカげてるとしか思えない。

それを考えると怖くなってきた。客観的に考えて、私と大地だったら死に近いのは大地の方だ

ろうし頭がヤバイのは大地だろう。

でも、一番ヤバイのって、もしかして私？ だって大地は拳銃を持ち歩き葉に溺れてまで生きてる。さっきの創作の話で感じたけど、世の中に対して強い不満を持ちそれを力説した。それは生きることへの強い欲望のあらわれなんじゃないかな？

こいつは死にたいんじゃない。今にもちぎれそうな木の枝についている葉っぱにしがみついても生きたいと願ひ死を恐れている。

拳銃があるからいつでも死ねるんじゃない。私は、いつでも死んでもいいと心の底から思っているから、そういう道具を持ち歩かない。葉やリスカまでして生きようと思わない。自分を傷つける事をしながら生きるくらいならすぐに生きる事なんてやめるわよ。

本当に恐いのは、後悔やトラウマや不満悩み全てが吹き飛び、無になる事だ。

私は、学校をサボりまくり皆にあいつは学校を辞めるんじゃないか？ と噂されているやつらの事を考えていた。不良連中や学校をサボりながらもちよくちよく顔を出すやつにかぎって絶対学校辞めないんだよね。

逆に、これまで真面目に学校来ていたヤツが突然あっさりと学校に通うのを止めて不登校になる。大地はそれと同じだ。大地みたいなやつはぐだぐだと文句を言いまくり他人に迷惑をかけながら、何食わぬ顔して生き続ける。

悩みのあるやつは生きたいと思っている証拠。悩むことさえ面倒に感じている私はヤバイのかもね。

私はグロック十七を握った。引き金を引けば一瞬で死ねる。

大地の顔に銃口を向けてみた。ついさっきの出来事が思い出される。始めて拳銃を撃った感触。しびれる手。天井にあいた穴。あの天井の穴は私の心の穴そのものに見えた。

ふと思った。拳銃があれば、無理矢理世の中をねじ曲げられる。いや、そんな大げさな話じゃなくていい。自分の身の回りの小さな世界を変えられるかもしれない。でも、拳銃で今いる環境を変えるなんてフェアじゃない。

まあ、今の私にフェアも卑怯もクソもないけど。

大地は左手で拳銃をつかんで「やめろよ」と笑いながら言った。

「あれ、さっきから気になってたけど、あんた左利き？」

「まあな。お前は普通に右利きか」

頷く。

「俺、子供のころ右手でご飯食べたり字書いたりするようにしつけられたんだ。でも無理だった。真面目に練習しなかったから。俺、小さい頃からどうでもいいことに反抗しまくってた」

大地は拳銃を握りながらまた笑った。

ここには拳銃がある。天国へも地獄へも行ける。でも、拳銃なんかなくても本当に死にたい人はあっさり死んでしまうんだ。拳銃はただ手間が省けるだけ。

あーあ。死にたいな。でも、死ぬのは怖い。普通そうだよな。人を殺すにしても自殺するにしても、大多数の人間は直前で思いとどまって、しばらく死というものを忘れて生きる。そして、嫌な事があるとまた死を思い出す。そしてまた忘れる。その繰り返し。本当に死という行動に移す事はしない。

でも、その一線を越えてしまう人がいる。それが私にはわからない。でも、わかる時がくるかもしれない。わかった時には、死んでるんだろうけど。

でも、そうだよな。死にたければ死んでも良いんだ。でも、死にたくない人は死んじゃだめ。愛は死にたいなんて思っていなかったのに、いじめに耐えきれずに死んだ。どんな世界でも、強いやつだけが甘い蜜を吸い続けられる時代なんだ。

私が死のうが人を殺そうが、愛には近づけない。もう、永遠に愛を感じる事は出来ない。

拳銃は死を簡単にできるだけで、生きるための道具にはならない。愛の苦しみは死にたいという願望へと変わり、拳銃が願望を実行へと変えてしまった。

拳銃の意味がわからない。でも私は、拳銃の意味を知るべきなのかもしれない。

「まあ、焦る必要はない。いつでも死ねるんだからさ。せつかく出会ったのにすぐ死ぬのはもったいないし」

死のうとしていたヤツの口からもったいないなんて言葉出るもんか。

「なあ、優菜。今日からここで学校生活を送るんだよな」

「いざそう言われると、クサすぎて鼻がねじ曲がるわ」

大地は暗闇の中で苦笑いした。

「いいじゃん。ここには俺達しかいないんだしさ。なあ、そうだよな？ また、学校生活送るんだよな？」

と、大地はお願いするように言った。私に頷いてほしいと顔に書いてある。

「まあ、そうだね。私らは学校に行っても行ってなくても世間的には学生だしさ。ここが学校でもいいと思う。学校生活ってのは、他人に認められている場所で過ごすもんじゃない。世の中結局のところ本質が大事なのよ。だから、ここでいいんじゃない？」

大地は指をパチンと鳴らした。

「そうだよな！ 俺達、学生なんだよな！」

私が黙り込むと、沈黙が流れた。なんだか眠くなってきた。眠りたい。何も考えずに、ひたすらに眠りたい。

永遠に眠りたいとも思った。でも私は眠ってはいけないとも思っていた。

「なんか、疲れちゃった。もう寝よう」

「え、もう寝るの？」

「うん。私、今日は色々あって眠いんだ」

「なんだよ。そっけねえな。今日から俺達のたった二人きりの学校生活が始まるんだぜ。もっと楽しまなきゃ。俺達は自由なんだから、好きなことやりたい放題。なあ？」

私は大地から拳銃を強引に奪い取った。そして撃鉄を起こして小屋の壁に二発、弾丸を撃ち込んだ。

翌日、私は昼頃に起きた。携帯の画面には十三時二十分と表示されている。一瞬こどこだよと思ったけど、うん、そうだ。私はちょっと危ないヤツの所に来たんだったよね。

あーあ。これからどうなるんだろう。一日寝て頭が冷静になったみたい。私、何やってんだろう？

拳銃。里奈。汗がへばりついているスカート。何もかもがサイアク。良いことなんてないもない。もしかしたら、世の中には良いことなんてないのかもしれない。

小屋の裏に回ると、歯を磨いている大地がいた。手には水のペットボトル。

「そんな所で何してるの」

「歯磨き。小屋の後ろで隠れてないと、近くの人に見つかるからな。言い忘れてたけど、あんまり小屋のまわりうろうろするなよ。小屋の出入りを頻繁にするとさすがにバレちゃうよ」

むしろ、なんでバレないのか不思議なんだけどね。

私は大地の横に座った。大地がタバコを一本渡してくれたので火をつけて一口吸った。鼻と口から煙りを吐き出す。

「アンタ、こんな生活ずっと続けてるんだよね」

「まあな。慣ればなんてことない。あ、今日はお前のために寝袋とか歯ブラシとか買わないとな」

大地はニコリと笑ってそう言った。そして口の中から歯磨き粉とよだれをドバツと吐き出して、水を飲んで口をもごもごと動かし、地面に吐いた。

「ねえ大地。この小屋に住んでいても、近くの人に見つからないの？」

「大丈夫だよ。見つかっても、誰にも渡さない。このチニタ・コタンは俺と優菜だけのもの」

「チニタ・コタン？」

「この小屋の名前だよ」

呆れた。小屋に名前つけてる。男って意味分かんない。この小屋がアンタと私だけのもの？なんか小さい。こんなボロ小屋が唯一、私が人との繋がりを確かめられるものなんだ。なんて私はくだらない存在なんだろう。

昨日はたった二人きりの学校生活とか言ってたけど、多分昨日はテンションがおかしかったんだ。

じゃあ学校に戻る？それは無理。戻れない。だってあそこは学校じゃないもん。だったら大地との二人きりの学校生活の方がマシってもんよね。と、私は自分に無理矢理言い聞かせた。

「ていうか、この小屋は元々何に使われていたの？」

「さあ？ どうせ物置だろ。あと、つい最近まで強姦によく使われていたらしい」

私は心臓がドクンとはねて、胃袋の中身が口から吐き出てきそうな気持ちになった。

「ご、強姦？ アンタ、そんな小屋に女を連れてきたわけ？」

「お前、処女？」

「……」

大地はいやらしい笑いを浮かべながら言った。

「生きる気力がなくて、知らない男についてくるくせに純潔は守りたいのか。お前、人生にまだ希望持ってるんだなあ。うん、いいよ、その心がけは。安い女に価値は無いからな」

その浅はかな考え方に私はうんざりした。でも失望はしない。だって、大地なんてどうでもいいもん。失望というのは相手を信じていることが前提。だから、失望するまでもない。

……私は世の中に失望している。ということは、私は世の中に希望を持っていたのかな？ だとしたら、私はニワトリよりも頭が悪い。

「なあ優菜。お前、これからどうする？」

「どうするって？」

「いや、この小屋で生活する事は決まったけどさ、ただ毎日ぼーっとしているのもアレじゃん。何か一つ、やること決めてみたら？ 学校生活に目的は必要だろ」

「なんでアンタに先生みたいな事言われないとダメなのよ」

大地は傷ついたような顔になった。その顔は意外と可愛かったけど、同時に情けないとも思った。

「いや、別にそんなつもりはねえんだよ。ただ、何か一つくらいやることはあった方がいいと思うんだ」

こいつは、私が小屋での生活が退屈になるとあっさりと出て行くとか思っているのかな。それは考えすぎ？ 本当に、ちゃんとした学校生活を送る気での？

でも、こいつの言う事は一理あると思った。何か一つやる事を決めないとさすがに暇だもん。無になりたいような、ただ単純に暇がつらいから何かを見つけないような。よく分からない。何もしたくないのか、何かをしたいのか。

私は何かを求めているのかな？

自分の両手を広げてじっと見つめてみた。そして指の間接をくねくね動かす。

死を招く学校に失望した。私を冷たい目で見ると母親しかいない家にはいたくない。居場所がほしいけど居場所はない。私ら学生には学校と家しか居場所がない。その二つを失ったらどうしようもない。

でも、一時の幻とは言え私は自由だ。誰かに与えられた生活じゃない。この小屋に住むことは大地にすすめられたけど、最終的には私の意志でここにいることにしたんだから、やっぱり私は自由。

自分の両手をぎゅっと握って、また広げる。

私には一つだけやりたい事があった。でも、やりたい事を夢中でやることは世間から冷たい目で見られることだと知った。

私は小説を読むのも書くのも好きで、家にいる時はほとんど小説に触れていた。親はそんな私をちょっと頭のネジが外れた子どもを見るような目で見ている。あの親の目を思い出す度に、親の目を指でえぐりたくなる。

でも、ここでの生活では全てが許される気がしたし、大地と二人きりなんだから冷たい目も恥もクソもないよね。

愛が死んでから小説は一度も書いてなかったし読んでない。でも、もう一度書いてみるかな。

今ならまた小説を書けるような気がしてきた。そうだ。愛が死んだ真相を私が代弁すればいいんだ。そうだよそうだよ。文章は言葉よりも強いんだ。愛が里奈たちのせいで苦しんで死んだこと、私が小説で世間に訴えればいいんだ！

拳銃なんかじゃ何も解決しない。ただ悲しみを生むだけ。でも文章は全てのものを救ってくれる。

えへっ。愛、待っててね。今すぐ私が凄い小説を書いて、あなたの無念を晴らしてあげる。愛は私だけのもの。愛は私の親友。愛は私の全てなんだから。

里奈には、大切な愛を死なせた罪をきちんと償ってもらわないと。

私は久しぶりに楽しい気持ちになってきた。腕がふるえて脳みそが活性化して興奮して爆発して奇声をあげそうな感情の高ぶりを強く覚えた。それなのに、泣きたくなってきた。どうしてだろう？ 愛のための小説を書こうとしてるんだから、私は楽しい気持ちだけ抱くはずなのに。

「大地、パソコンがほしい」

「パソコン？ ネットやりたいならネットカフェ行けよ。さすがにこの小屋にコンセントは無いぞ」

「この小屋でもパソコン使いたいの。だから、なるべくバッテリーが長持ちするパソコンがほしい。あと、データを保存するためのUSBメモリもほしい」

私は手書きでは小説を書けない。字汚いし時間かかるし。ってパソコンが無ければ文章書けないってのも変な話だけど。

「さすがにパソコン盗むのは無理だから、買うしかないな。中古でもいい？」

「いいよ、中古でも」

「じゃあ、今から万引きで稼ぎにいきますか。お前の生活用品も買わないといけないし」

大地はそう言うと、唾を地面に吐いて歩き出した。

私達は厚別区にある個人経営の店らしいゲーム屋にいた。大きな道路に面した場所にあり駐車場には沢山車がとまっている。店の前にはガキどもがむらがってアイスを食べながら座っている。

私は周りをキョロキョロと見回していた。ぽつんぽつんと建つコンビニやスーパー。遠くの小さな丘に立ち並ぶ同じような形をした家。

学校の人が追ってこないか不安でしようがない。どう考えても、皆必死に私を捜しているはず。携帯の電源は切っているけど、メールや電話が大量に来ているのは間違い無い。誰とも関わりたくない。ただ、今はうまく私のために働いてくれる大地が側にいればそれでいい。

私は何度も息を大きく吸っては吐いて、里奈を突き落としたという恐怖を心の奥底にしまいこんだ。

私は悪く無い。全て里奈が悪いんだ。あいつの性格が腐っていて、この世の中に拳銃を作った政治家が悪いんだ。

私と愛は毎日二人で幸せな生活を送っていたのに、里奈と拳銃のせいで全てをぶちこわされた。

そうだ。里奈みたいなやつ、窓から突き落とされ当然なんだ。私が悪いと言うのなら、里奈を

正義だとでも言えればいいの？ ふざけないでよね。

大地は口に咥えていたショートピースを地面に投げ捨てた。

「店は結構広いけど、この店は商品に防犯用のシステムとかつけてないから、簡単に盗れる。お前は見張り役な」

「見張り？」

「ああ。こういう個人経営の店に万引きGメンとかあんまりいないと思うけど、当然店員の目はあるからね。お前は店員の視線が俺を追っていることに気づいたら教えてくれ」

「わかった」

なんだか、突然楽しい気持ちになってきた。ワクワクする。。ついニヤけてしまう。

「いいか？ 絶対にキョロキョロするなよ。堂々とゲーム買いに来ました！ って顔で店に入るんだ。お前、制服で少し目立つし」

確かにそうかもしれない。私服を来た人間の中にセーラー服が混じっていたら、自然と目がいく。でも、私はこのセーラー服しか着るものがない。

私はまず服が欲しいって大地に訴えたけど、服を買う金がないと言われて拒否された。服を買う金くらい残しておいて欲しい。

「よし、入るぞ」

大地は店の中に入った。私はもの凄いスピードで脈打つ心臓をなんとか落ち着かせようと深呼吸をしながら後に続いた。

店の中には沢山の棚が並んでいる。店の出入り口から見て一番右奥にレジ。左奥にはゲームの攻略本が大きな棚に並んでいる。

そして中央には棚がいくつも並びゲームが沢山置かれている。私達の前を通った店員が「いらっしゃいませー」と言って笑顔をむけてくる。

「優菜、お前、何のゲームほしいんだっけ？」

「え？ あ、うーん。RPG」

「そっかそっか。RPGはあっちかな？」

大地はスタスタと店の奥へと歩いて行く。店の奥には小さな棚が乱雑に置いてある。後ろを向くと棚に隠れてレジは全く見えない。レジに店員が二人。見た目は大学生。そしてさっき挨拶してきた店員も結構若かった。それ以外に店員は見あたらない。店長らしき風貌の人もいない。事務室にでも引っ込んでいるのだろうか。

万引きはしたことはないけど、イケると思った。

でも、大地はどうやって盗むんだろう？ 袋とか鞆とか何も持ってないけど。私はここに来る前に鞆とかいらなの？ って聞いたけど、怪しまれるからダメだと言っていた。

大地は据え置きゲーム売り場ではなく、携帯ゲーム機の売り場の前で止まった。携帯ゲーム機のパッケージは小さい。

私は大地から少し離れた棚の前で、適当にゲームを選ぶふりをする。そして近くを歩いていた客が遠くへ行った瞬間、大地は値段の高いゲームをジープンのポケットに一つ突っ込み、そして三本同時につかんで上着の内ポケットに突っ込んだ。更に棚の横に置いてあるワゴンへと近づ

いた。ワゴンには、昔のゲームのカセットがまるで捨てられたように突っ込まれている。まさに投げ売り。

大地はMDより小さなそのゲームのカセットを右手で持てるだけ持つと、ジーパンのポケットに押し込み、更にもう一度大量にカセットを無造作にかき集めて内ポケットにも突っ込む。

私にチラッと視線をよこしてきた。私は何食わぬ顔で大地の後ろについた。早く逃げなきゃ！

そう思ったけど、大地は何故かすぐに店から出ないで店の隅をうろうろし始めた。な、何してんのコイツ？　なんで店から出ないの？

店員が私達の横を通った。

「あ、優菜。このゲーム新しく出たやつだ。面白いかな？」

「え、あー。どうだろう。つまないんじゃない？　絵だけが綺麗って感じ」

「やっぱりそうかあ。最近のゲームメーカーは綺麗な絵で着飾る事しか頭にないからなあ」

店員はさっさと私達の横を通り過ぎていった。大地は歩くスピードを速めることなく店の出入り口へと歩き出す。

そしてドアのところまで行った。レジを一瞥する。店員はこっちを見もしない。私は後ろをみた。店員も客も私達を見ていない。

大地は店から出た。私の心臓は破裂しそうだった。

店から出ると、大地は一気に小走りになり無言で店から遠ざかり、門を曲がってコンビニの裏にまわった。

コンビニの裏に座り込むと、私に向かって笑顔を向けて言った。

「はい、成功！」

大地は、ポケットから盗んだゲームを全て地面にばらまいた。新品のゲームが数本。ワゴンに入っていたカセットが大量にある。

「結構収穫あったな。新品のゲーム盗めたのが大きい。このワゴンのゲームはおまけ程度だなあ。箱無し説明書無しじゃ、雀の涙だよ」

私は興奮がおさまらなかった。凄い。本当に盗めちゃった！

「ねえ。どうしてすぐに店でなかったの？　危なっかしくてひやひやしたよ」

「バカだなあ、お前。すぐに店出るなんて危ないよ。万引きは、あくまでも店を出たら万引きになるんだ。極端に言えばさ、店を出る直前に後ろふりむいて、明らかに怪しいヤツと目合ったらそいつは万引きGメンだ。でも、そこで気づいたら商品戻して帰ればいい」

なるほど。つい私は感心してしまった。感心することじゃないんだけど。

「それに盗んだあと店をぐるぐる回れば、自分が後をつけられているか見られているか確認出来る」

「考えてるね。で、全部でいくらになりそう？」

大地はゲームをじっと見つめてぶつぶつと呟きだした。

「最初に盗んだ新品のゲームは六千八百円がひとつ。五千八百円のゲームが三つ。携帯ゲームで六千八百円は大きいね。新品だから、それぞれ千円か二千円くらいしか引かれないだろうし、売れば軽く一万は超えるだろ。んでワゴンで盗んだゲームは……。全部で三千円いけばいいほうかなあ」

「じゃあ、中古のパソコン買えるかな？」

「うーん。物によるだろ」

「性能悪くてもいいよ。文字を書くことが出来れば」

「なんだ。それなら十分だ。あ、そうだ。ちょっとここで待ってて」

大地はそう言うと、ゲームをおいたままコンビニの中へ入っていった。すぐに戻ってきた大地の右手にはコンビニの袋。中にはジュースとコンビニ弁当。

「昼飯だよ」

大地は袋の中からペットボトルと弁当を取り出して地面においた。同じものが二つずつ。そしてゲームのパッケージに貼ってある値段のシールを器用に剥がし、カセットについている値札も全部剥がして袋の中に突っ込んだ。

私は笑ってしまった。これで、あたかも自分の家のゲームを袋に突っ込んで売りに来たっていう風になるだろう。

大地は弁当を口の中にかきこみ始めた。私も弁当を食べることにした。お米を口に放り込み卵焼きを口に放り込んだ。

こういう生活もいいかもしれない。そんなことを言ったら大多数の人間は、当然私の頭はおかしいと思うだろう。いや、分かってるよ。万引きをする生活が正しいわけない。万引きを正当化する世の中なんてありえない。

拳銃がある世の中なんて認めない。人が人に苦しめられて自殺する世の中も認めない。それでもなお、万引きしたり家出したり学校に行かず大地との生活を学校生活と思い込み、まともなことなんて一切しない生活を否定しないのか？

多分、その理由は言っちゃいけないと思う。誰もがその理由を言うことは許されない。でも、私はいつかその理由を言ってしまうかもしれない。

私はもうまっとうな生活なんて捨てたんだ。楽しい。こういう生活は楽しい。スリルがあって良い。今はそれでいい。

私達は弁当を食べ終わってジュースを飲み終わると、ゴミをゴミ箱に捨てて次の目的地へと向かった。

大地は他のゲーム屋でも新品のゲームを何本も盗んだ。そして三件目のゲーム屋に来た。

「ここでも盗むの？」

「いや、ここでは盗まない」

このゲーム屋は大谷地駅の目の前にあるチェーン展開しているゲームショップだった。駅の周りは車が沢山走っていて、色々な店が並んでいて騒がしい。

「このゲーム屋は高く買い取ってくれるんだ。いいか、優菜。ゲームの万引きを主な資金源とするなら、戦利品を売る専門のゲーム屋を一つ決めるんだ。至る所で盗んでたら、売る店が無くなっちゃうからな」

くっだらねえと思っちゃったけど、大地のおかげでパソコンや生活品が買えるんだから口には出さなかった。

ゲーム屋で売ったゲームを売ると、なんと三万円になった。こんな大金を手にしたのは初めてかもしれない！ えへへ。世の中金が全て。お金大好き！

店から出ると大地は嬉しそうに言った。

「こういう店ってさ、何本売ったらプラスでいくらかお金もらえるじゃん。売れば売るほどボーナスがプラスされるから、得だよ。お前、財布は？」

私はスカートのポケットからヴィトンの財布を取り出した。本物じゃない。パチモンだ。中には千円札が一枚と小銭が少々。ポイントカードだけ大量にある。

大地は一万円を私にくれた。ありがたく受け取りポケットに突っ込んだ。。

「さて。そいじゃ次は中古のパソコンだな」

大地はそう言うと、大谷地駅へ歩いていった。

「ねえ、遠くに行くの？ 厚別じゃダメなの？」

「良い店知ってるんだ。東札幌まで行くぞ」

私達は地下鉄の東西線に乗り、数駅行った所にある東札幌まで行った。駅から降りるとすぐに中古のパソコンショップが現れた。

店の中に入りさっそくパソコンを物色する。でも、なんだかほこりっぽくてすぐに店から出たくなった。でも、大地は嬉しそうにパソコンや液晶やキーボードを眺めている。男って、本当にこういうの好きだよな。

「ねえ大地。このパソコンはどう？」

「お前、それワープロだろ」

「いいよ、ワープロでも」

「さすがにワープロ買うのは金もったいない。……これはどうだ？」

大地が指さしたものはノートパソコンだった。見た目はかなり汚い。

「ほら、これ。七千五百円だよ。日本のメーカーじゃないけど、ウィンドウズXPだぜ？ メモリは二百五十六あるからなんとか許せるだろう。周波数は七百かあ……。まあ値段を考えるとしょうがないか。USBポートも二つちゃんと動くみたいだし、これで良いんじゃない？」

「じゃあ、これにする。あと、USBメモリ」

大地は周辺機器のコーナーからUSBメモリを持ってきた。

「千円で二ギガある。これでいいか？」

「それだけあれば十分」

大地は店員を呼んでパソコンとメモリを買ってくれた。

店を出ると、大地は額を腕でふいた。

「このクソ暑い中パソコン運ぶのはしんどいなあ……」

確かに暑い。札幌といえども太陽は熱を出し続けてくる。幸い風が吹いているから良いけど、それでも暑い。今は七月の初旬だからまだ良いけど、八月になったらもっと暑くなる。嫌だ嫌だ。夏なんて大嫌い。

あ、ていうか、もう少しで夏休みになるのか。私には関係ないけど。

「私も持とうか？ 疲れるでしょ」

「バカ。女に持たせられるか。もう少し、男のプライド考えてくれよ」

「プライドとかどうでもいいんじゃないの？」

大地は汗を腕でふき、パソコンの買った段ボールを持ち直しながら言った。

「だから、それは、自分だけの問題だよ。女の子に持たせるなんて悪いじゃん。ありえないよ」

他人には危害を加えたり迷惑をかけたりしない。そんな気持ちが伝わってこないわけでもなかった。

私達はまた地下鉄に乗って大谷地駅に戻り、二十分ほど歩いて小屋に着いた。

小屋を見た瞬間、「やーっと帰ってきた！」と歓声を上げた自分を心底アホだと思った。なんでこんな所に戻ってきてホッとしてるんだ。

大地は両手で担いでいた箱を床に置くと、汗を流しながらさっき買ったジュースを一気に飲み干した。

「暑い。マジで死にそう」

「ご苦労さん」

私がそう言うと、大地は汗を手でふきながら笑った。

「で、お前これで何するの？」

「何でもいいでしょ」

説明したくない。このパソコンで何をするのかあっさりと説明するほど甘い気持ちは持っていない。私は小説を書くのが好きだし、大人になっても小説を書き続けることが出来たらいいなと思っている。小説を仕事にして生きる事が私にとって唯一の幸せなんだ。文章を書かないで生きる人生なんかクソ食らえ。生きる意味無し。

私は飽きっぽい性格でどんな事でも簡単に途中で放り投げるけど、小説だけは自分でも不思議なほど飽きないし、むしろ趣味の時間を放棄してでも小説に使う時間を作ってきた。

言葉に出来ないほど小説が好きだからこそ、私はその事を死んでも口に出したくない。

私は、簡単に夢を語り理想をハンパな気持ちで持つヤツが何より嫌いだ。本当に自分の抱く夢を叶えたいと思っている人は、簡単にその夢を口に出さない。中途半端な気持ちで夢を叶えたいと思っているヤツに限って、ぺらぺらと小説家になりたいです！ とか歌手目指してます！ っ

て叫ぶのよね。バカみたい。そんなに夢を語ると夢が安っぽくなる。

夢を叶えるというのは、力よりもまず覚悟が必要なんだ。夢を叶えられるなら内蔵の一つや二つぐらいくれてやるわあ！ くらいの気持ちじゃないとダメなんだ。

凄まじい覚悟と行動力と力を持っている人は、やっぱり夢を簡単にハッキリと口に出さない。同じ夢を目指している仲間と言う事はあっても、良く知らないヤツにあっさりと言うわけがない。

小説に触れる事と愛と二人で過ごす事が、唯一私の生きる力だった。

でも、私は愛が死んでから小説を書けなくなった。世の中全ての意味がわからなくなった時、私は小説の書き方がわからなくなったんだ。目の前にある世界全てが嘘に見えて、嘘を書くのが辛かった。綺麗事なんて書きたくないと思った。何も考えたくない表現したくない。表現がとても意味がなく無駄に思えた。

私は愛がいじめで自殺したことを周りに訴えた。先生に何度も説明した。いじめた奴らの家に押しかけた事もある。当然、突っ返された。

学校の記者会見は私を絶望させた。いじめは無かったと教頭が断言した時、世の中は腐っていると確信した。

そして、どんな言葉も文章も、大人や強い圧力には勝てないと思った。人の表現なんか、豆腐を手で潰すかのようにあっさりとぐちゃぐちゃにされる。

でも、私はもう一度書くんだった。私は何もしたくないわけじゃない。何をしたらいいのかずっと分からなかった。でも、結局のところ私は文章を書くことしか出来ない人間なのよね。

私は自分が食べ物を食べる生き物だということを疑うようになって、表現の力がどんなものにも負けないという事だけは信じ続けたいと思う。

愛の気持ちを百パーセント私が理解するなんて無理かもしれないけど、愛の気持ちを代弁して事実を訴えることの出来る人間は、私しかいないはずだ。書ける。書けるはず。

血がざわめく気がした。体の底からどーっと血がたぎってくる。

それと同時に、不安も募ってきた。そんなのただの自惚れで自己満足なんじゃないかな。私には結局何も出来ない。いじめられて友達が死んでも、子供である私にはどうすることもできない。ただ悲しみに潰されるだけ。

世の中そういうもんなのか、違うのか。どっちなの？ 誰か教えてよ。

でも、誰かが教えてくれるわけではない。それを見極めるためには、やっぱり書いてみるしかない。

「私今からちよっと作業するけど、アンタは今から何するの？」

「うーん。お前の寝袋とか歯ブラシとか買って来るよ。服はどうする？」

「作業終わったら買いに行く。今は暑くて、あんま外ふらふらしたくない」

「わかった。じゃあ俺、なんか適当に買って来るよ」

「え、悪いよ。自分のものくらい自分で買いに行くってば」

「いいっていいって。お前、今すんげえやる気のある顔してるんだもん。俺、ダメ人間だけどさ、やる気のある奴の邪魔だけは、絶対にしないから」

大地はのそのそと小屋から出て行った。

なによ。ちょっと、いや、かなり嬉しかったじゃない。反則だ。今のは反則だ。

もしかしたら私、大地と二人で本当に楽しい学校生活を送れるかもしれない。生きていけるのかもしれない。ここなら。ここで二人きりなら。理不尽なことなく生きていけるのかな。

さすがに、やりたくないことをやらずに生きたいとは言わない。やりたくないことでもやらないとダメってことは分かってる。でも、人の死だけは認めない。人の死をないがしろにして、愛が死んだ理由を隠す学校という存在が認められる世の中、もう終わった方がいい。中二病とかじゃなくて、マジで。

書かないと。

私はパソコンの電源をつけた。……遅い。起動するまでかなり時間かかりそう。でも、幸いバッテリーは満タンのままだった。しばらくしてデスクトップ画面が現れる。

ワードはさすがに入ってなかったけど、メモ帳で十分だ。

まずはプロットを練り始めることから始めなきゃ。

夕方、私は大地の覚醒剤を口の中に入れて噛み砕いていた。鼻水とよだれが太ももの上に落ちた。スカートは涙でしめってる。太ももに落ちた鼻水とよだれを人差し指でのぼしてみた。ぬるぬるして気持ち悪い。あはっ。

私は思い切り床に倒れ込んだ。その体勢のまま生ぬるい水を飲んだ。ほとんど飲み込まず口から吐き出る。水が床にだらだらと垂れていく。ペットボトルを放り投げて、床に落ちた水をなめとる。よだれが顎に垂れて気持ち悪い。でも、その気持ち悪さが心地良い。私は手を伸ばして床に転がっているタバコの箱を掴み一本抜き取り、ライターで火をつけた。寝転がったまま吸うのは難しくて、思い切りむせた。

何か切るものはないかな。自分の腕を切りたい。横じゃなくて、縦に切りたい。腕に生々しく浮き出る血管を縦に切りたい。

私は自分の頬をグーで思い切り殴った。心地良い痛み。もう一発。更にもう一発。私は自分の右手をじっと見つめた。出来物が潰れて血が出たのだろう。私の手は赤く染まっていた。そして、ぶわあっと大量の涙が出てきた。いやだ、いやだ。生きたい。私はこんなんじゃない。

「おい優菜！」

私は突然の声に驚いて、しばらく振り向きもせず固まった。大地は私を抱き起こすと真っ青な顔をして私をガクガクと揺らした。

「お前何してんだよっ」

大地は遠慮なしに私の口を右手で無理矢理あけた。そして口の中に手をつっこみ、覚醒剤のかけらをとりだして、舌についている細かいものも見逃さずに捨てた。そしてあたりをせわしなく見回し、舌打ちするとゲームを入れていた袋で私の顎や頬についた唾液をふいた。私は首をだらんと大地の腕の上に垂らしてなすがままになっていた。今なら、胸を触られようが、パンツに手突っ込まれようが、どうでもいい。

「お前、なんで血出してるんだ。自分で殴ったのか。それに、なんで覚醒剤そのまま食ってんだ。そのまま口に放り込んでいいわけねえだろ！ おい、ほんとどうしたんだよ」

「ねえ大地。キスしよ、キス！ ほら、ね？」

大地は私の事を、化け物でも見るかのような目を見た。恐怖に支配されたような、不愉快な目。

でも、すぐに大地は目をぎゅっと瞑ると、一変して男気あふれる顔になった。不覚にもカッコイイと思った。

「何が嫌なんだ。何が辛かった？」

「私、書けない」

「書けない？」

「ちよっとの間書いてなかっただけなのに、クソみたいな文章しか書けないの。私、これでも、小説の新人賞で二次選考まで残った事あるんだよ。それが、あんな……」

大地はパソコンの画面を見た。そして画面に並ぶ文章を見ると全てを理解したような顔をした。

「そうか。お前は小説を書くのがうまいんだな。それがお前の唯一の心のよりどころで、生きる力だったんだな？」

私は頷いた。

「でも、二次選考まで残った力を最近まで持ってたんだろ？ 落ち着け、優菜。別に何十年も書いてなかったわけじゃない。ちよつと今日は調子が悪かったんだよ。それに考えてみろよ。お前は今、学校にも家にも帰らないで、こんなイカれた気持ち悪い男と二人で過ごして、こんな小屋で一日寝たんだぜ？ そんな狂った環境でまともな精神を保ってこれまで通りの小説書けるわけないだろ。大丈夫。家に帰って落ち着きでもしたらまた書けるよ。だから落ち着け」

大地はもう泣きそうな顔になりながら私をガクガクと揺らしていた。よく表情の変る子だなあ。可愛い。

「優菜、帰るか？ 落ち着いた方がいいよ」

「嫌だ。家は嫌。だって、私のお母さん、私のこと嫌いだもん。いつも冷たい目で見てくる。顔に書いてあるんだ。この子死ねばいいのにつて」

「じゃ、じゃあ。とりあえずこの小屋からは出よう。どこか、もっと、良い所に行こう」

「良い所なんて、どこにもないよ。私ら、学校と家しか居場所はないんだよ。ここはやっぱり学校なんかじゃない」

「学校は？ 学校は嫌いか。ここじゃない。本当の学校は？」

「愛が死んじやった」

「……え？」

「私の親友。幼稚園から中二まで同じクラスだった。小さい頃イタズラして先生に怒られるときも、始めて買い食いに行く時も、始めての寄り道も、始めてのカラオケも、始めての遠出も、いつも一緒だった。私は愛の髪の毛の先から足の爪の先まで何でも知ってる。それなのに、里奈達にいじめられて死んじやった。毎日毎日いじめられてた。私は助けることができなかった。ねえ、愛の遺書のメールが来た時と、死んだと知らされた時と、学校が記者会見でいじめを隠蔽して、愛の気持ちよりも自分達の立場を守った時の私の気持ち、わかる？」

大地は宙をぼーっと見た。そしてすぐにハツとした顔になった。多分、この人も、あの記者会見見ていたんだ。

「そうだよ、あの愛っていう子が、私の、親友、なんだよ。」

大地はもう涙を流していた。そして自分の事のように悔しそうな声をしながら早口で言った。「くそっ。大人が悪いんだ。大人が悪いんだ。何が大人の事情だよ。大人は大人でどうしようもない立場とか理由があるってか？ そんなの俺達からすれば知ったこっちゃないのにな。結局俺達の世界は、子供の死より自分の立場を守るようなところなんだ。俺達、どこで幸せになればいいんだよ。なあ優菜。俺の親、一ヶ月前、人殺したんだ」

「殺した？」

大地は鼻水が垂れるのも気にせず何度も頷いて「そうだよ、そうだよ」と言った。大地の鼻水が私の口に垂れてきた。舌ですくって舐める。

「拳銃で、元彼撃って殺したんだ。まだ捕まってない。逃げてる。家はもともと母子家庭だった

けど、俺の知らない所で沢山男作ってたんだ。そして、元彼がストーカーになって、うざくなって撃ち殺したんだ。なあ、なんで俺は何も悪い事してないのに、殺人者の子供にならないとダメなんだよ！ 親が人殺しだぞ。もう俺の人生お終いじゃないか。気づいたら、俺の人生パーになってた」

私は大地の首に両腕を回して思い切り抱きしめた。そしてえぐるように唇を大地の唇におしつけた。鼻水と唾液がべっとりと唇と頬にまとわりつく。私は口に入り込んだ鼻水を思い切り飲み込んだ。唾液が舌に絡まる。

大地は、一瞬死んでしまったの？ と思ってしまうくらいに、力なくぐったりと床に倒れ込んだ。

夜になった頃、私は起きた。あの後、抱き合ったまま寝てしまっただけ。口や頬や顎がべたべたしていて気持ち悪い。でも、その気持ち悪さは何故か私の心をゾクゾクさせた。頬を触ると、唾液が乾いたのかカサカサになっていた。ついニヤけてしまう。

ああ、私、生きてるわ。うん、確かに生きてる。舌の感触。唇の感触。大地のにおい。でも、愛は私の中に入ってこない。

遠くに行っちゃった。今、愛はどこで何してるのかな？

大地はぐっすり眠っている。小屋の外に出ると、涼しい風が肌を撫でた。

今日は何故か、夜の森が優しく見えた。近くに見える住宅地の方が気持ち悪く思える。住宅地が非現実的で、この森だけが唯一の現実に見える。

このまま森に吸い込まれて、すうっと、飛んでいきそう。風につつまれたまま空にふわふわ上がっていくんだ。

私は一人で笑った。何考えてるんだろう。

何がしたいんだよ、私。もしかしたら、新しい可能性でも求めているのかな。サイアクな人生を送っているワタシ。でも、何もかもリセットして新しい学生生活を送るワタシ。

生きる事への希望と恐怖。死ぬ事への興味と恐怖。生きるにしても死ぬにしても怖いことに変わりはない。

一人になりたくない。私は大地と二人でいる。それで良いのかな。良いかもしれないけど、本質的には正しくないのかもしれない。

口の中に指を突っ込んで歯と舌をなぞってみた。大地の気持ちが入り込んでいるような気がする。

私は悔しいけど、認める事にした。自分は死ぬのが怖いのだと。でも、この先生きていく自信がない。何もかもが汚いし気持ち悪い。愛はどこ？ どこにいるんだろう。なんで死んじゃったの。

自分の胸を触ってみた。張りがある。でも、ばばあになったらしわしわになるんだろうな。次に太ももを撫でてみた。自分で言うのもあれだけど、結構長くて細い。足は自慢なんだ。でも、ばばあになったらやっぱりしわしわになる。つか、年とったらスカートなんか履けない。セーラー服を着られるのも、考えてみたらあと少ししかないんだ。

なに、私、もしかして制服を誇りに思っているの？ スカートを堂々と履ける年齢だという事を誇りに思っている？ セーラー服が自分の若さを象徴する証？

生きたいと思うから、若さに喜び制服を着ていると嬉しく思えるの？ でも、どうせすぐに年寄りになるんだ。嫌だ。年とってしわしわになりたくない。ババシャツなんか着たくない。一生ミニスカートを履いていたい。年とったらこの長い髪も艶がなくなっちゃうの？ 嫌だ。嫌だ。嫌だ。私は子供でいたいよ。

それに、あんな汚い大人になりたくない。私も大人になったら、周りに沢山いるような大人になっちゃうのかな。そんなの絶対に嫌だ。

私は子供の気持ちを忘れたくない。今の自分のリアルな感情を失いたくない。自分の命を失う

よりも、今心の中に抱いている全てのモノを失う方が怖い。

十四歳。あと六年で二十歳。どうしよう。どうしようもない。どうにもできない。人は年をとることに抗うことはできない。許されない。

恐くなってきた。頭をおかしくしたい。変になりたい狂いたい。おかしくなれば楽になれる。だって悩みを忘れてバカみたいにへらへら笑えるんだもん。

体が震えてきて、体の中から嫌なものがこみあげてきた。

私は、思いきり吐いた。口からすっぱい液体がドロドロと出て来て地面にびちゃびちゃと音を立てて落ちる。

何やってるんだ、汚物が地面に広がっている。汚い。汚い。汚いよ。私ってこんなに汚いものをいつも体の中に隠してるんだ。自分自身が汚物に思えた。

「あーあ。きったねえ」

「うっさいな。吐いちゃったもんはしょうがないでしょ」

大地は、まばたきもせずに、ニヤニヤしながら私の汚物を見つめていた。

私は土と石を嘔吐した液体の上に置いた。精一杯のカモフラージュ。汚いものは見えないところに隠すもんよね。

でも私は自分自身を隠す事はしたくない。だから愛の事をなんとかしたいという気持ちは隠さない。

でも、世の中それじゃ生きていけないよね。自分をおさえて、まわりに合わせて、空気をよんで、引かれないように、嫌われないように、潰されないようにして、生きていく。

でもそれでいいの？ 自分の個性や素を永遠に隠しながら生きていくの？ それが世の中なの？ 私が幼稚なだけ？

そうだ。世の中そういうもんなんだよ。だからこそ、私は愛が本当に好きだった。全ての個性と素を受け入れてくれて、私が何を言ってもやっても、あの子は引かないで受け入れてくれた。

でも、里奈たちは他人の個性を許さなかった。愛という一人の人格を、理不尽に否定した。そして愛が何もやりかえさないと見ると、そこにつけ込みやがった。

私は、自分の目の前で愛が何かされている時、必死に里奈たちのいじめから守るのが精一杯だった。でも、いくら親友でもさすがに二十四時間愛のそばにいることは出来ないし、あいつらは一瞬の間を見て愛の鞆を窓から投げたり愛の悪口を大きな声で言うんだ。

まるで、誰かをいじめるために学校に来ているようなやつらなんだ。

このまま、私はずっと悩み続け、潰れていくのかな。

どうすればいいの。私はどこに行けばいいの？ 私の手のひらには何も残ってない。全部どこかに落として来ちゃったよ。

後ろに気配を感じて振り返ると、大地がすがすがしい顔でドアの前に立っていた。夜空に浮かぶ月をバックにして、長い髪をばさばさと風でなびかせている。

ゆっくりと歩いて私の横に並ぶと、大きく息を吐きながら座った。そして地面に生えてる雑草をむしった。

大地の手には拳銃が握られていた。

「お前、今の生活楽しいか」

「出会ったばかりの男との生活、楽しめると思う？」

大地は苦笑いした。

「じゃあ言葉を変えるよ。この生活続けて、楽しめそうか？ 何か見つけられそう？」

「分からないよ、そんなこと。明日どうなってるかすら分からないのに、楽しさを見いだしたり、何か新しいものを見つけるとか、そんなの無理。ただ、息を吸うだけで精一杯よ」

「まあ、そうだよなあ。……なあ優菜。お前、本当は普通の学校に通いたい？」

「なによいきなり」

「いや、なんつーかさ。俺は二人でこのまま生活していてもいい。でも、優菜はどうなのかな。なんていうか、その。吐くまでしてここにいるの、お前にとって良いことなのかなって思うんだ。やっぱり俺達、普通の学生やるべきなのかな？」

よく分からなかった。世の中はクソで理不尽だし、学校なんてなくなってしまう方がいいと思ってる。でも、このまま強がってここでの生活に没頭してもいいのだろうか？

このまま強がったまま私はどんどん地に落ちていくのだろうか。

なんていうか、私はまともに生きることもドロップアウトすることも怖いよね。どうしたらいいんだろう。その答えが見つからない。

何がしたいの？ 何をすれば私は幸せになれるの？ それを見極めるためには何が必要なんだろう？

そりゃあ私だって教室で友達に囲まれていたいし、お付き合いというのもしてみたい。大人になったらドレスを着たい。バーでお酒も飲みたい。

でも、今のままだったら、私は廃人になるだけだ。つーか、現実的に考えてこのままじゃ誓ううちに補導されるのがオチだ。

やるべきことはなに？ 愛の死。自分の抱いている学校への不信感。そういうこと、もっと深く考えるべきじゃないの？ 諦めるのは大人になってからでもいいんじゃない？ 妥協したり考えるのをやめたりするのはもっと先で良い。今何かしなきゃどうにもならないんだ。

わかりきってることだけど、ただここにいるだけじゃダメなんだ。何かしないと。何か見つけないと。

世の中がクズでも私はクズになる気はない。

「私は色んなことを知りたい。愛がいじめられて自殺したことも、学校がどうしておかしくなってしまったのか。いろんなことに向かい合いたい」

大地はしばらく考え込んでいた。しばらくすると、大地は今まで見た事のないほどに真剣な顔をしていた。この大地の顔を見ていると覚醒剤をやっていることが信じられなくなってくる。

「俺の親は人を殺した。お前の親友は自殺した。どっちも、拳銃のせいで命が消えた。そんなの悲しすぎるよ。言葉を聞く耳持たずに、拳銃で一発解決なんて、人間関係を放棄してるだけだよ。気に入らないやつはみーんな撃ち殺せ！ って感じじゃん？ そんなんじゃダメなんだ。ダメなんだよ。それは俺達がよくわかってるはずだ。このままじゃダメなんだ。このまま二人で縮こまっただけでもダメなんだ」

大地はショートピースを口に咥えた。

「俺達はもう落ちるところまで落ちた！ 落ちて落ちて落ちて、奈落の底に落ちた。だからもう落ちることすら出来ない。でも一番下まで落ちたって事は、下には行けないけど上には行けるってことだ。俺達は嫌なことを嘆くだけじゃダメなんだよ。嘆く対象の奴らのこと何も分かってないじゃん。加害者のやつらと面と向かって話すべきなんだ。一番話したくない奴らと向かい合う勇気が必要なんだ。拳銃なんかいらねえ。携帯なんかいらねえ。俺達は耳と口と鼻がありやそれでいいんだよ！」

「大地……」

「明日、お前の親友をいじめた奴らに会いに行くぞ。俺もそいつらに会って、人を死に追いやる奴らと向かい合う。世の中確かにクソだけど、どういう風にクソなのかよくわかってない。世の中クソだって言うなら、どうしてクソなのかとことん追及すりゃあいいんだよ！」

「……そ、そうだよ！ 世の中クソだ！ 里奈たちなんて死ねばいい！ ここまできたら、クソみてえな世の中もって知ってやる。里奈たちの汚いところ、全部えぐってやる！」

私と大地は、手がしびれるほどの勢いでハイタッチをした。そして骨が折れるほどに手を握り合った。

私は一番嫌いな言葉を、今心の底から強く感じていた。

きずな。

朝起きて、私はぼーっとタバコを吸っていた。大地はすやすや寝袋の中で眠っている。あまり眠れなくて、頭がぼーとしてる。

私は愛といつでも一緒にいたのに、愛が感じた自殺するほどの絶望も苦しみも何も分からない。

愛の気持ちを知りたい。死というものはどういうことなのか。

命を粗末にするな。簡単に考えるな。よくそう言うよね。そりゃあ、それくらい私だって理解出来る。命を簡単に考えられると言う事は、それこそ死ぬほど自分がどうでもいいということだ。

でもね、最近は何をあっさり殺す人間が多いんだよ。自分の命だけが大切に他人の揚げ足をとることだけが得意で、他人の言う事を認めず自分以外の命をゴミだと思ってやがる。

自分の命なら、クズだと思おうが大切だと思おうが勝手にしてくれ。でも、他人の命に手をだして潰すのは止めてほしい。

人は、もう落ちる所まで落ちたのかな。そうは思いたくない。

私は起きてすぐ、物思いにふけた。昨日は、よく眠れた。大分落ち着いた。大きく息を吸い込み、吐き出す。私は大丈夫。

私は大地の体を揺すって起こした。寝袋の中でもそもそも動き、顔をあげて私を見ると目をゴシゴシとこすりながら「おはよ」と呟いた。

その後は、大地が買ってきた歯ブラシで歯を磨き、近くの公園の水道で顔を洗った。つーか、私これじゃ普通にホームレス？ と思ったけど、大丈夫。私はちゃんと屋根の下で寝ている。

私は制服の匂いをかいだ。うーん。キツイ。水道の水をぶっかけてみたけど、当然全く持って意味のない行動。

「一応、昨日服買ったけど着るか？」

「え、買ってきてたの」

「ああ、俺、結構センスいいんだぜ」

大地は小屋へと戻っていった。私も後に続いて小屋へ行くと、大地は紙袋の中から数着の服を取り出した。Tシャツが三枚。黒色、白色、グレー。何故かドクロがデザインされたものばかり。あとショートパンツが一着。スカートが一着。

なんだか、不思議な気がした。男の人が用意した服を着る。大地はこういう服を私に着せたかったのかな。夏だから薄着でシンプルなものを買ってきたらしいけど、デザインがドクロだったりスカートが短かったり。

お人形さんみたい。男が用意した服を着る私。

「俺、女ものの服買うの恥ずかしかつたんだぜ」

と、大地はごまかすように言った。

「私が自分で買おうと思ってたのに……。なんかごめんね」

「いいよいいよ。ていうか、デザインこれでいいかな？ ダサくない？」

「うん。全然大丈夫」

私はとにかく新しい服を着たくてしょうがなかった。セーラー服は汗でべたべたしていて気持ち悪い。一刻も早く脱ぎたい。気持ちが落ち着いてくると、突然服も何もかも綺麗でいたくなる。

私はセーラー服をさっさと脱いで下着姿になった。

「お、おい！」

「ああ、ごめんごめん。脳みそがエロだけで出来てる中学生には、刺激がありすぎた？」

ぽかんと口を開けて私の体を見ている大地を無視して、Tシャツを着てスカートを履いた。結構短い。でも水色のフリルのスカートは可愛くて気に入った。

あ、ていうか、下着もとりかえないと。でも、さすがに大地が女の下着買って来られるわけないか。

大地は私が服を着終わると、咳払いをして言った。

「心変わり、してない？」

「冗談言わないでよ。行こう。里奈たちに会いに行こう。どんな所にいても、追ってやる」

大地はけらけらと笑った。

「お前、追いかけている立場なんじゃないの？」

私はタバコを床でもみ消した。

「私って、鬼ごっこでは断然逃げる方が好きなのよ」

私達は、住宅地を抜けて国道をゆっくり歩いていた。

街の光景は私の心をゆさぶる。人が生きている事を嫌でも証明されて、この街にいる人間の中で私だけがおかしいんじゃないかと思っちゃう。

綺麗なビルを見るのはなんだか不愉快で、雑居ビルの前にちょこんと立っている看板を見ると落ち着く。

意味不明な気持ち。

いろんな人が街を歩いている。可愛い子。イケメン。そして目がキツイやつとか明らかに調子こいてる雰囲気満載の人間を見ていると、里奈達の顔が頭に浮かんでしまう。

私は愛を苦しめた里奈達を許さない。許さないと怒るだけじゃ気がすまない。行動にうつさないと、愛は浮かばれないし私は前に進まない。

でもこれは私の問題で大地には関係ないんじゃないのかな？ でも、大地だって拳銃の意味について知りたいんだから、私達は同志なんだよね。

歩く度に気が重くなる。いつそ妄想だけして生きていたい。妄想の世界じゃ私は神様だ。

人は現実逃避をしないと生きていけない。というのはあまりにも私の個人的な意見だろうか。漫画を読み二次元の恋愛に酔い酒を飲み我を忘れ、薬で頭をおかしくして幻の快楽を得る。アイスとお風呂で平穏な日常を演じる。

私にはもう永遠に平穏は訪れない。ずっと忘れていたけど、私は里奈を窓から突き落としたんだ。もう、どうでもいいや。もしかしたら打ち所悪くて死んでるかも。いや、さすがに二階から落ちてても死なないか。でも、頭か落ちてたら？

まあ、別に死んでいてもいいよね。人を殺すやつに生きる価値なんてあるもんか。大人は更正の余地があるとかいって、人を自殺に追い込んだ子供に重い刑をあたえないけど、それだとやっぱり死者は報われない。なんとも死者に厳しい世の中だ。

愛はまだ十四歳だった。まだ何も始めてなかったんだよ。見るべきものを見ないまま、感じるべきものを感じないまま、本当の人生の楽しみも知らないまま、人生には価値があるのか無いのか見極めることすら出来ず、死んだ。

人生、厳しい。だって、一人の人間の死なんてワイドショーを賑わせてすぐに忘れられていく。テレビで流れているニュースを見た人は、まあかわいそうこんな若い子が死んじゃうなんてと適当に眩き、テレビでコメンテーターだか評論家かが偉そうに子供の心理を語ったりする。でも、人はすぐにその一人の人間が確かに皆と同じように生きていて、そして死んでいった事は忘れられてまた別のニュースに意識を集中して騒ぐんだ。

一人の死を永遠に悲しむことは、家族や友達などの周りの人間しか出来ない。

愛にまた会いたい。愛と二人でお弁当を食べたい。愛と二人でコンビニに行きたい。愛と二人で寄り道をしたい。愛と二人で、同じ高校に行きたい。大人になった愛とバーでも行ってみたい。

里奈達の事は死んでも許さない。愛が自殺してしまうような世の中も許さない。

小説は、一度書く気になったけどまだ踏ん切りがつかない。でも、今日の夜頑張って書いてみ

よと思う。私が出来た事といったら、もう小説しかない。小説以外でまともな事なんか出来やしない。

大地はショートピースを歯で噛みながら、ずっと鞆に目をやっていた。鞆の中には拳銃が入っている。

私は、言うべきことを言わなきゃダメだと思った。

「ねえ大地。私ね、アンタと会う前に、愛をいじめてた里奈ってやつを、窓から突き落としたんだ」

大地は首をがばっと私の方に向けた。

「え、嘘だろ？ 冗談だろ？」

「つまらない人生送ってる私が、つまらない嘘言うわけないでしょ？」

「……かたきうちか？」

「かたきうちか……。それとは、ちょっと違うかも。私、大地と会った日にね、里奈たちに拳銃突きつけられてたの。放課後の教室で、だよ？ 信じられないでしょ。でも、今じゃこんな光景、多分フツーよフツー。それで私、里奈のひどい言葉に耐えられなくて、窓から突き落とした。でも死んでないと思う。だって落としたのは二階だもん」

大地は歩くのをやめて、私の顔をじーっと見つめてきた。

「なんで黙ってたんだよ！ おかしいだろ！ 一番大事なことじゃないか。くそっ。でもなおさら、そいつらと会うべきだ。窓から突き落としてもなんの問題にならない。だって拳銃で人を撃とうが窓から突き落とそうがそれは圧倒的な暴力だ。何も解決しない」

「でも、暴力でしか解決できないことはある。だから暴力は世の中から消えないんだよ」

愛が里奈達に受けた暴力。修正液を髪の毛にかけたり髪の毛引っ張って壁に頭ぶつかけたり、ネットに愛の悪口書き込んだり。

そんな暴力に対して出来ることと言ったら、暴力しかないじゃない。言葉を武器にして人と戦うには限界がある。

だって、人は人の意見を聞くことがとても苦手だから。

私は、愛が里奈達にやられたいじめの内容を話した。すると大地は、悪魔でも見たかのような顔になった。

「最悪だな。人のやることじゃない。そんな事をして実際に一人の人間を死に追いやるヤツなんて、二階の窓から落とされても文句いえねえよなあ。それに、お前だってその里奈ってやつが親友の事を悪く言って、自分にもひどい事を何かしたから窓から落としたんだろう？ 優菜は正常だよ。だって、親友を自殺に追い込んでおいて、更に反省もせず愛と優菜を攻めるヤツが目の前にいるのに攻撃しない方がおかしい。むしろ、俺は親友をそこまで追い込んだ奴に拳の一発すら入れないヤツの方がおかしいと思う」

私は複雑な気持ちになった。私のやったことは普通におかしい。愛があんな目にあっただけで人を窓から突き落としていいわけがない。どんな理由があろうとも人を窓から落とすなんて事が正当化されるわけない。

でも、私は里奈を窓から落としたことに後悔はしていなかった。あの子は私にいじめの事で相

談してきた。遺書となったメールに書かれていた内容は、もう思い出したくない。

でも、学校はいじめを隠蔽した。ただ、家族と私をふくめた友達が泣き崩れるだけだった。それじゃあ、愛が可哀想すぎる。生きている人間だけがそれで良いなんて考え私は認めない。愛は愛だもん。生きていても死んじゃっても私の永遠の親友なんだ。

いじめを隠蔽されていじめていた五人は平然とした顔で学校に通ってる。ただ私達が悲しみのどん底にいて、愛は人生を終わらせた。

そりゃあ、里奈たちを冷たい目で見える人達はいるけど、学校全体でそういう雰囲気になっているわけじゃない。

何にしても、あいつらは生きている。愛は誰かに視線を向けられる事すら出来ないんだ。

私はどうすれば良いのかわからなかった。どうしたら愛が少しでもむくわれるのか。だって里奈たちが平然とした顔で、何の罪もかぶらずに大人になるなんておかしいじゃない。愛は大人になる事が出来なかったんだから。

でも、大人たちはいじめの事実を隠したがるだけ。誰も話を聞いてくれない。むしろ忘れようとしていた。しょうがない。その一言で全てを片付けられそうで恐かった。そしてあの日、ついに我慢の限界が来て、窓から里奈を突き落とした。あれ以外、私には愛のための行動が思いつかなかった。

でも現実に目を向けると、私はただ傷害罪とかそんなような罪をかぶる必要のある女の子。そんなの絶対おかしい。私は悪く無い。悪いのは人をいじめる里奈みたいな人間だ。そして拳銃だ。もっと言うなら、拳銃を作るような人間達だ。もっともっと言うなら、人間を作った神様だ。みんな、死んじゃえ。

私は中央区の街並みを歩きながら、小学校の卒業式の日を思いだしていた。

「ねえ優菜ちゃん。やっと卒業したね。長かったね」

愛は、学校の玄関の前で立ち止まってそう言った。クラスメイトは皆声を大にしてあちこちで騒いでいる。

「うん、長かった。でも、楽しかった」

「ねえ、中学生になったら何したい？」

「寄り道！」

私がそう言うと、愛はパチンと指を鳴らした。

「だよね。お財布持って、帰りどこかに寄るんだもんね。あ、でも、中学生になったら受験があるよねえ。嫌だ嫌だ」

「ほんとだよね。勉強なんてクソ食らえだ！」

「そうだクソ食らえだ！」

私達は甲高い声を上げて笑い合っていた。でも、愛は急に真剣な顔になると言った。

「でも、受験はしなきゃダメなんだよねえ」

「まあね。愛はどこ的高校行きたいの？」

「高校とかよくわからない。だって、どんな高校があるのかすら知らないもん。それに札幌って高校多いから難しいよ」

「そうだよね。でも、私は旭岡高校が良いかな」

「なんで？」

「やっぱり地元が良いじゃん。近いに越したことはないよ」

「確かにね。じゃあ、一緒に旭岡高校行こうよ。そしたらさ、また中学と高校で六年一緒にいられるよ！」

愛は満面の笑みでそう言った。

「そうだね。マジ受験頑張ろう！ って事は私達、幼稚園から数えて十五年間も一緒に過ごすって事？ それって、なんか、すごくない？」

「そうだよ優菜。十五年も一緒にいるなんてなんかヤバイよ。もう結婚するしかないよっ」

「じゃあ結婚しようよ！」

「うんうん！ 結構しようっ。優菜、俺と結婚してくれー！」

「あ、愛！ 愛してるよ！」

私は気づくと、一人で笑っていた。思い出し笑いどころじゃない。声が出るのを我慢するのがやっと。おかしすぎて、頬がヒクヒクする。

でも、すぐに私の頬の筋肉は緩んだ。突然襲いかかる虚無感。旭岡高校に入るという約束を果たせなかった。十五年一緒にいるどころか、愛は十四歳で死んでしまった。幼稚園で出会い、高校生となり十八歳になって大人になっていく愛を、見る事はもう叶わない。

その気持ち、どうしてくれる。愛という一人の人生、どうしてくれる。なんで、里奈は平気な顔して笑っているんだ。どうして、私に拳銃を向けるんだ。

私は、おばあちゃんになっても愛とられるものと信じていた。学校がいつか別になってしまったとしても、大人になったお互い北海道から出て行ったとしても、地球に隕石が突っ込んできたり宇宙人が突っ込んできても、愛とはいつでも会えると思っていた。

愛はどういう人と結婚するんだろうとか、十年後にはどういう人になっているんだろうとか考えていたのに、それ全てを、里奈達の、不愉快な笑顔といじめを持って、全て消された。一人の命を奪っておいて、いつまでも笑って普通の人生を送れると思うなよ。

怒りがこみあげてきた。あの時、里奈いがいの四人も窓から放り投げておけばよかった。

ダメだ。狂ってる。

私は口をおさえながら道路にしゃがみこんだ。

「おい、どうした。優菜？」

「だ、大丈夫」

「無理するなよ」

大地は私の背中をさすってくれた。別に涙は出てこないのに、何故か嘘泣きでもいいから、涙を流したい気持ちだった。

吐きそうだったけど、私は吐かなかった。もう、吐くものすらないのかもしれない。

私達は地下鉄大谷地駅にたどりつくつと、東西線に乗って大通駅で降りた。私の通う旭岡中学は中央区にある。里奈たちと会い、腐った人間の本质を私は知る必要がある。それじゃないと私は何もわからないまま死んでしまう。でも会ってどうするんだろう？

頭が痛い。私は迷ってるの？ 里奈たちとまた会うのが怖い？ 学校の人と会うのが怖い？ それとも、学校がある中央区にすることが辛いのか？

「なあ、ちょっと喫茶店でお茶していかない？ お前、落ち着いた方がいいよ」

大地が指さした先には、喫茶店があった。

「あ……」

この喫茶店、行った事あるよ……。

ここは私の思い出の場所。始めて行った喫茶店。愛と二人で行った喫茶店。だから、私は喫茶店ならここ以外は行きたくない。それに、ここなら落ち着いて何もかも話せる気がするんだ。

この喫茶店は木造建築で、店の中の壁も机も椅子も全て木で出来ている。店の中は薄暗く、棚には沢山のお酒が載っていてかなり大人な雰囲気だけど、学生専用メニューなどがあり、近所の中高生に人気がある。店の中央にドーナツ状のカウンターがあり、そこでマスターは皿を拭いていた。私は帽子を脱いだ。

「いらっしゃいませ。お二人様ですか？」

ウエイトレスがにこやかに声をかけてくる。私が頷くと、店の一番左奥に案内された。この店の一番左奥は学生専用席なので、見た目が学生だったり子供だったりすると問答無用で左奥のこの席に案内される。

「ご注文は？」

「オレンジジュースで」

私がそう言うと、大地は視線をメニューから離さずに「ペウレ・コーヒー」と呟いた。

ウエイトレスはすぐにジュースとコーヒーを持ってきた。ジュースを一口飲んで、私は言った。

「ねえ。里奈達に会って、どうすればいいんだろう」

「あいつらに会わないとお前は親友の死をどうにもできない。あいつらが親友の子をいじめたことを認めなきゃ話にならない。じゃないと誰もむくわれない。俺は、拳銃を使うやつの神経が理解できない。でも、理解しなきゃ俺は何もわからない」

私はなんだか悲しくなってきた。なんでもいいから、喋りたかった。

「愛は死んだのに、世の中全ての人間を憎いと思えない。きっとどこかに愛みたいな優しい子がいるとか、私達の気持ちを理解してくれる人がいるんじゃないとか、私を受け入れて平和な生活に導いてくれる人がいるかもしれないって、思ってるんだ。誰かにすがりたい。でも、見透かされるのは怖い。かと言って誰にも何も見透かされずにいるなんて無理。私は誰も理解したくないけど理解はされたい。でも自分は相手を理解したくないけど、理解してほしいなんて虫の良い話だよ。それでも、何かも分かってもらってそして側にいてほしい。だから、私は死という覚悟が出来ない。でも、誰もが簡単に撃鉄を起こして引き金をひくというのなら、私は死を見る事が出来るかもしれないと思うんだ。本当に絶望して、何の未練もなく消えることが出来るかもしれない」

私は絶望したいのかもしれない。もう人生やってらんないから死にますと言いたいのかも出来ない。

そうだ。私は愛という事で小さな希望を見る事が出来ていた。でも、愛が死んだ事で絶望を見た。

そしてもう希望を抱く自信がないから、いっそもっと絶望に包まれて潔く死ねる踏ん切りがほしい。

私はオレンジジュースを飲み干した。

「あーあ。なんか、もう、わかんないや。人生最悪」

「本当にそうだよな。人生、つまんね。訳わかんない」

私達が声を大きくしてそう言うと、突然カウンターにいたマスターが私をちらりと見て言った。

「お客さん、今何歳なんですか？」

「じゅ、十四歳ですけど……」

大地は小さく頷いた。

「じゃあ、人生は最悪じゃありません」

「え？」

大地は呆然としてマスターを見ている。マスターは五十歳代のおじさんで、結構紳士みたいでカッコイイ。

「見て下さい。この私の顔。脂っこいでしょ。この手も見て下さい。しわしわです。あと最近、節々が痛くて痛くてしょうがありません。そして本を読む時は眼鏡がかかせません。老眼なんです。そして何より、私みたいなおじさんは、君みたいに可愛い女の子と喫茶店デートなんて事、もう出来ません」

突然、何を言い出すんだろう、この人は？

「君、えーと」

「あ、茂師理大地です」

「もっしー君ですね」

「やめてください」

「じゃあ、りー君？」

「だから」

「もー君？」

「あのう」

「いやいや。若い男子なら、可愛いあだ名でもしっくり来る」

しっくり来ているのは貴方だけです。

「いいですか？ 子供同士で、いちやいちゃと喫茶店でお話出来るなんて素晴らしいじゃないですか。おじさんは羨ましい」

マスターがそう言うと、ウェイトレスの人がガバっとマスターを見た。かなり可愛い子で、見た目からして多分女子高生。

「マ、マスターもしかしてロリコンなんですか？ だ、だから私を雇ったんですかキヤー変態！」

ウェイトレスはタオルをぱたぱたさせてマスターの前で騒ぎ出した。

「ほらね。おじさんになると、ちょっとした発言でロリコン扱いです」

この人の言おうとしている事はなんとなく分かるけど、何か根本的に間違っている。

「君はなんていう名前なのかな？」

と、マスターは私を見て言った。

「西孤優菜です」

「優菜さんだね。君、今のうちに人生最悪なんて事言うのはもったいないよ。まだ君は若くて、何も見てないんだ。このしわしわの脂ぎった僕を見なさい。そしてその後に、自分の体を見なさい。ほら、それだけで君は素晴らしい」

私は自分の腕をなでてみた。すべすべしている。髪の毛を触ってみた。サラサラしている。頬を触ってみた。うん、ピチピチ。

「そうだよそうだよ。女子中高生はミサイルよりも強いんだよ。だから、貴方も年寄りじみた事言わないで、もっと前を見なさい」

と、ウェイトレスの子は言った。

「そうですよ。十四歳の君たちがそんな年寄りじみた事言っていたら、私の立場はどうなるんですか。私はミイラですか」

マスターはコーヒーを一口啜って続けた。

「結局、いつか人は老いるんです。でも、貴方達はまだ老いていない。若いってだけで誰よりも強いです。だから、若さを取り柄に生きて下さい。若いうちには色々な可能性があります。でも、その可能性を信じて頑張った結果、必ず報われるわけじゃない。ただ、失敗は許される。それ

に可能性を信じる気持ちがないと、報われるものも報われません。年とったら、色々、不自由なんですよ」

よくわからなかった。だって私が若いのは当然だもん。いきなりそんな事言われてもわかんない。

でも。私は近い将来を考えてみた。女子高生になり卒業したあと、どうするのかな。とりあえず大学に行く事ということにしてイメージしてみた。すると、十八歳、十九歳と学生生活を送り二十歳になる。そこからは、三十路へのカウントダウン。数年したら四捨五入すれば三十路になる年になる。

それを考えると、大人という存在になるのはすぐそこまで来ているじゃないかと思った。二十歳前後になった私は、もう若いと言われる存在じゃなくなる事に脅えているだろう。誕生日が嫌になる年が近づいている。

そっか。大人も結局子供の延長線上にあるんだ。そして二十歳を越えたらもうレールから外れることはできない。その年からレールを外れるには相当な努力と覚悟と運がいる。

でも、私はまだ何でも出来る。愛の事を考えながら、愛の死について死ぬまで考えながら、自分にとっての幸せな世界を探す時間は十分にある。

私達がいくら悩んだとしても、結局すぐ大人になっちゃうんだ。それに、立派になれと言われてはいわかりました立派になりますと言って、立派になれるわけがない。

悲しいな。私達が真剣に悩んだところですぐ大人になっちゃうんだ。今は大人に勝手な理想のイメージを植え付けられたり、テレビで子供の事を真剣に語っているものの、実際は完全なる見当外れでしか評論家とかに腹をたてたり、子供の現実や汚いところを見てみぬふりして真実を信じようとしないう大人達に呆れてるけど、それでも私は大人のステージにすぐに立つ事になる。

そっか。私、大人になるんだ。それなら、なんとかなるような気がしないでもない。

大地だって、人を殺したのは親であり自分は何もしてないんだから、なんとか出来るんじゃないかな。

でも、家と学校は嫌だ。あの場所では私の幸せは訪れない。里奈窓から落としちゃったし。

せっかくマスターの言葉で生きる気力が出てきても、生きる場所がない。世の中、気持ちだけじゃどうにもならない事だってあるんだ。

私達は店を出た。

「ねえ大地。お金、大丈夫？」

「ああ……。かなり減ったな。お金引き出すかあ」

大地がそう呟いた時、遠くから「優菜だ！」という声が聞こえた。

私の心臓がドクンと跳ねた気がした。今の声には聞き覚えがある。

「優菜いたよ！ あそこ、ほら！」

私は勇気を出して後ろを振り向いた。手下の四人だった。佐々木、木下、村田、杉内。

「お、おい。誰だよあいつら。こっち走ってくるぞ」

大地は後ずさって手下たちを指さした。

「だ、大地。あいつら里奈のとりまきだよ。ヤバイ。私、捕まっちゃう」

セーラー服四人組がもの凄い形相でこっちに走ってくる。

私と大地は顔を見合わせた。

「向こうから来るなんて最高じゃん！ やっぱバカはどこまでもバカだ！ 獲物が自分から来るなんて！」

私は首を横にふった。違う。間違ってる。

逃げるしかない。こいつらから逃げるなんておかしい話だけど、逃げるしかない。

「逃げよう！」

「は？ な、なんでだよ！ もう一度里奈たちに会いたいんじゃないのかよ！」

「里奈がいない！」

「でもあいつら四人がいるだろ！」

「やっぱり違う。会っても無駄よ。見てよあいつらの顔。私達何されるかわからない。無理よ。私達がどうあがいたって、結局暴力しか出来ないよ！ だって、私、言葉っていうものがわからないもん！」

私と大地は走り出した。佐々木がすさまじい雄叫びをあげて追いかけてくる。

「どうする。どこに逃げる？」

「大通駅だ！ 人混みに紛れるぞ！」

私達は全速力で走った。帽子が落ちてどこかに飛んでいく。

そして大きな道路に出た。すると、丁度よくバスが止まっていた。行き先は大通り駅前。

バスの扉が閉まろうとしている。後ろを振り返る。まだ距離はある。ギリギリあいつらから逃げられる。

「乗るぞ！」

私達はギリギリでバスに乗り込んだ。手下たちは間に合わずに、走り出すバスを遠くから見ていた。

息を整える。大地は両手を膝についてぜえぜえいっている。乗客が私達を珍しいモノでも見るかのような目で見ってくる。なんだよ、そんな目で見るとなよ。

「これで大丈夫かな？」

「いや……。この街の中バスで走ってるんだ。油断出来ない。あいつらはタクシーで大通駅まで行くかもしれない」

「でも大通りつつても、めちゃくちゃ出入り口あるよ」

「出入り口は沢山あっても、結局同じ改札に出るだろう。そこで待ち伏せされる可能性は十分にある」

すぐにバスは駅前までついた。心臓の鼓動がどんどん早くなる。あまりにも早すぎて、心臓がエンストしそう。

こわい。なんで私はあいつらにビビってるんだ。おかしい。おかしいよ。愛をいじめた奴らにビビってる。

こんな自分、死んでしまえばいいのに。

テレビ塔近くで降りると、すぐに地下鉄の入り口から地下へと行った。長い地下通路を走る。そして大地は途中にあるウィズユーカードの自販機で千円分のカードを二枚買って一枚を私に渡した。

そして改札の前まで行った時、私はつい舌打ちした。

「おい優菜！ 逃げるなよ！」

佐々木が仁王立ちしていた。あー、もう！ やっぱり数の力には勝てない。こいつら、手分けして四つの通路で待ち伏せしてたんだ。駅の出入り口は無数にあっても、結局は同じ改札口前が出る。私の考えはやっぱり甘かった。

私は考えた。こっちは二人。強引に改札を突破することはできる。でも、この人混みと駅員の目がある所で騒ぎを起こしたら、佐々木どころか駅員につかまる。問題を起こすと圧倒的に私達は不利なのだ。

「行くぞ！」

大地は私の腕をひっぱって、別の通路へと走った。地下はとても大きくてまるで迷路みたい。あちこち走り回ってこいつらをまいて、隙をついて地下鉄で逃げるしかない。

私達は狭い通路まで行った。でも、そこは出口へ向かう通路だった。

「どうする？ 外に出る？」

大地が難しい顔で考え出したとき、私は気づくと前のめりになって床に倒れていた。後頭部に激痛が走る。

私は倒れたまま振り向いた。そこには、佐々木がいた。

「おい、お前何するんだ！」

大地が大きな声をあげて佐々木を睨んだ。佐々木はちょっとひるんだけど、ギロリと大地を睨んだ。

「優菜のせいで里奈、起きないんだよ」

と、佐々木が小さな声で言った。里奈が、起きない？ どういう事だか理解できなかった。

「二階から落ちて死ぬわけねえだろ！」

大地がそう叫んだ。突然見知らぬ男にそんな事を言われて佐々木は戸惑った顔をした。その隙をついて大地は私の腕を引っ張って走り出した。佐々木の横をなんとか通り過ぎる。

佐々木はハツとしたような顔をして追ってくる。駅での鬼ごっこに、まわりの人達が目をまん丸にして私達を見ている。

佐々木は長い髪を振り乱しながら、後ろから叫んできた。

「頭から落ちたんだよ。死んでないけど、あの子、目覚まさない！ どうしてくれんのよ！」

私は走るのを止めた。大地の腕を振り払う。

「お、おい。優菜？」

私は凄まじいスピードで走ってくる佐々木を睨んだ。佐々木は気にせず突撃してくる。

目の前まで来た。私は拳をかためて、思い切り迫り来る佐々木の顔をグーで殴った。

佐々木は悲鳴をあげながら思いきり床に吹っ飛んだ。頬をおさえて私を見上げる。私は佐々木の上に馬乗りになると、鼻と耳と口と目を何度も殴った。佐々木はなんとか両手で顔を隠して防御する。

そして頭を集中して殴った。愛に修正液をかけたのはこいつだ。愛の頭を後ろから殴ったのはこいつだ。愛の脳細胞を殺したのはこいつだ。愛をいじめたグループの一人はこいつだ。この頭潰して償えよ。

自分の拳に、生々しい感触がのこる。目のやわかい、ぐにやつとした感じ。頬を殴った時の骨の感じ。そして、里奈の頭。

しばらくすると、佐々木はぐったりして動かなくなった。よだれをたらして、スカートからパンツ丸見えでだらしない。私はつい笑ってしまった。

屈辱だろうね。でも、愛の受けた屈辱はこんなもんじゃない。アンタに死を覚悟する人の気持ちがわかるのか。ていうか、そんな気持ちにさせたアンタは何がなんでも償う必要がある。それなのに、なんだ、その態度。もう許せない。

「どうしてくれんのか、何それ。アンタ、頭おかしいんじゃないの。じゃあ言うけどね、愛はどうしてくれるの。アンタら、自分のしたこと忘れたとか言わせないよ。ねえ、愛はどうしてくれるの。愛はほしかったCDも買えず好きなものを食べることも出来ず好きな人と付き合うこともできず、アンタみたいに全力で走ることも出来なくなったんだよ。ねえ、愛はどうすればいいの。ねえ、愛のことどうしてくれるの。ねえ、愛を返してよ。愛が何したっていうの。ねえってば。答えてよ。愛は何も悪く無いよね。どうして愛をいじめたの。なんで愛は自殺しなきゃダメだったの。ねえ、黙ってないで答えてよ。どうして愛を殴ったの。なんで愛の悪口を色々な人に言いふらしたの。ねえ、アンタたち、なんで愛にあそこまでしたのよ。私はもう愛と遊べないよ。答えなさいよ。ほら、ねえ。ねえ！」

「おい、優菜！」

佐々木は涙を流して頭をおさえながら、小さな声で言った。

「し、知らないよ。アイツは勝手に死んだ。でも私達は生きている。世の中はね、生きている人間だけで成り立つんだよ。いつまでも死んだヤツの事考えてぐだぐだ言わないでよ」

「そんなのアンタが言う台詞じゃないよ。じゃあ、もしも里奈が死んでも、アンタ絶対ぐだぐだ言わないでよ。どうして里奈は死ななきゃいけなかったのって、言わないでよ」

「は？ 意味わかんないんだけど。里奈死んだらアンタを殺すよ」

「じゃあ、愛を殺された私はアンタを殺していいんだ」

「良いわけないでしょ。この殺人鬼！」

「何それ。貴方達は人をいじめていたのに、自分達が何かをされるのは嫌なの？ ねえ答えなさいよ。貴方達は愛をいじめたよね。そして、あの日私の口の中に紙くず入れて拳銃向けたよね。でも、自分達が何かされるのはダメなの？ おかしくない？」

私は怒りが頂点に達した。佐々木から離れて大地の鞆を開けてグロック十七をとりだした。そして倒れている佐々木の顔に銃口を向ける。

佐々木の顔が真っ青になった。まばたきもせずに私を見上げている。私の右腕はぶるぶる震えていた。愛。今、仇をとってあげるね。そうだよ。愛は死にたくなかったもんね。私の親友だもんね。

鳥肌がたって、私は感じたことの無いほどに優しい気持ちになっていた。地球が私の足を支えて、風が私を包んで、太陽が暖かい光りを私にくれて。目の前には草原が広がり、私は愛と二人でお話ししている。

えへっ。愛の顔がまた見られる。そんな気分になってきた。愛、今、こいつ殺してあげるね。私は撃鉄を起こそうとした。

「何やってんのよ！」

突然の声に私の優しい気持ちは一瞬で消えた。遠くから残りの三人がやってくる。

「そ、それ拳銃じゃん。マジ何やってんの？」

と、木下が叫んだ。

「何言ってるの。貴方達は私に拳銃向けたじゃない。でも、自分達が向けられるのは嫌なの？ 弱いね。小さいね。人を傷つけることしか出来ないんだ。私と愛が放課後楽しく雑談して将来の事について語っているときも、アンタたちはひたすら気にくわない人達の悪口で盛り上がってたんでしょ？ アンタ達、むなしいよ」

「う、うるさいって。とにかく拳銃こっち向けないで！」

木下はヒステリックにそう叫んだ。

「もしかして、自分は拳銃使って良いけど他人は使っちゃダメとか、そんな幼稚な事思ってるの？ いるんだよね、そういうヤツ。自分は何してもいい。弱いヤツなんか死んでも言い。そう思ってる。バカみたい」

「だから、愛みたいな気持ち悪いヤツ死んだって構わないでしょ！」

私は今度こそ撃鉄を起こした。

「アンタ達は死ぬ価値すらないけど、やっぱり生きる価値もないよ。殺してあげる」

私は右手でしっかりと拳銃を持ち、引き金を引いた。凄まじい音が駅構内に響いた。

でも、当たらなかった。大地が私に横から体当たりをしたせいで軌道がずれたのだ。三人は全員、ミイラのような顔をして座り込んでいた。

どうしてそんなに拳銃が恐いの、あの日私に拳銃を向けたんだろう。

「今はこいつら殺してる場合じゃないだろ！ それにこんなやつら殺す価値もない。こいつらのせいでお前が殺人者になる必要はない！」

大地は私から拳銃を奪って鞆に突っ込んだ。そしてまた私の腕を引っ張って走り出す。佐々木

以外の三人が追ってくる。

「おい、逃げるなって。マジふざけんな！」

杉内がそう叫んだ。大地は舌打ちをして、走るスピードを速めた。三人は佐々木のことが気になっているのか、もう全速力で追いかけることは出来ないらしく、どんどん距離が広がっていく。

この通路に人はいなかったから、誰かに見られて捕まるということはない。でも今の物音で誰か駆けつけてくるだろう。

それならそれで、別に構わない。もうどうでもいい。でも、それだと大地が困る。

改札でウィズユーカードを差し込んで階段を駆け下りる。

私達は東豊線に乗った。ギリギリで三人は乗り込めずにホームにたたずんでいた。そして大通駅で東西線に乗り換える。

大谷地駅まで行くと、大地はまだ私を引っ張って走った。あの四人は完全にまいたはずなのに、小屋まで全力疾走。

小屋までつくと、私は耐えきれずに吐いた。全力疾走のせいで体は壊れそうだし、あの四人の顔を思い出すと永遠にはき続けそう。

自分の両手をじっと眺めた。小さい拳銃なのに、反動が結構凄かった。あの弾が出る瞬間の感触。

「あはっ」

なんだか楽しくなってきた。快感。

「優菜。大丈夫か。おい！」

しばらく私は、小屋の前でしゃがみこんでいた。ダメだ。狂ってる。私、もう、普通にはなれない。もう引き返せない。普通の人生、さようなら。

大地は私の背中をさすってくれる。少しだけ、落ち着いてきた。

「なんか、アンタ、優しいね。最初会った時はイカれてたけど」

「お前のおかげだよ。お前見てたら、狂ってる暇もないよ」

大地はそう言ったけど、完全に疲れ切った顔をしていた。うんざりしたようにも見えた。

「とりあえず、休もう。今は何も考えちゃダメだ。……俺が、変なゲームをしようと言いだしたから、こんな面倒な目に合ったんだ。俺が変なことやろうとしなきゃ、中央区まで行く必要もなかったんだ。本当にごめん」

「どうして大地が謝るの？ 悪いのは私だよ。貴方は何も悪くない。悪いのは、人を殺すようなやつらだ。私達は被害者なんだから」

大地はショートピースを口にくわえた。私は床に落ちているライターで火をつけてあげた。

紫色の煙が大地の口から吐き出る。煙が目にはいって痛い。

「ねえ、大地。あいつらどう思う？ ボコボコに殴られても当然だよ。だってあいつら愛をいじめたんだよ自殺させたんだよ何されても文句言えないよね？」

大地は大きく頷いた。

「そうだ。俺もそう思う。優菜がさっきのヤツをボコボコにしたのは、例えるなら洒落にならないイタズラや悪い事をした生徒を教師が殴るとか、そういう事だと思う。俺だって、人をいじめ

て自殺までさせるようなやつ、殴られても文句は言えないと思う。暴力はいけない事だけど、あ
あいうヤツは絶対に罰を食らうべきなんだ。……でも！」

大地は、圧勝していた試合で、最後の最後にくだらないミスで負けた選手のような顔をして言
った。

「優菜は悪く無い。親友を失ったんだから、あいつらを殴る権利は絶対にあるはずだ。でもそれ
は世の中が許してくれない。あそこまでやったら優菜が悪いって言われて、あいつらが被害者にな
るんだ。おかしいよ、絶対におかしい。だから、俺はそういう世の中が嫌いなんだ。どれだけ
ひどいことをした人でも、やり返されるとたちまち被害者になって、絶望や悲しみの底を見た人
間に加害者になってしまう場合だってあるんだ。絶対おかしい。じゃあ、本当にひどい目にあつ
た人達はどうすればいいんだ。それが世の中だと大人に諭されて、悪い事をしたやつらが平和に
生きていける世の中なのかよ。そんな世の中で誰もが卑屈にならずに生きていけるわけがない」

私は気づくと涙を流していた。いいんだよ、別にいいんだ。私が今何をしようとも愛は戻って
こない。私は復讐をしたいわけじゃない。ただ、愛を返してほしい。死ぬべきじゃない人が理不
尽な目にあって亡くなったんだ。それなのに、あいつらが生きている事が心の底から許せない。

大地は私の気持ちを理解してくれている。そしてそれを言葉に出してくれる。それだけで私は
崖から落ちずに、なんとか崖の端っこで踏ん張る事が出来る。

拳銃。人を殴った時の感触。全てが無意味だった。

私は、何もせずに悲しみながら生きるしかないのだろうか。世間の圧力と戦うなんてバカげ
てる。こうやって、色々な事を諦めて、輝いているものを手のひらからぼろぼろ落としながら、
理不尽な事を受け入れて全ての事を無理矢理納得しながら大人になっていくのかな。それで大人
という存在になるのだとしたら、私には子供でいる事も大人でいることも理解出来ない。何もか
も嘘にしか見えない。

私は寝袋の中に入った。無になりたい。

夜になって私は起きた。最近生活リズムが狂っていて、そのせいか頭が重い。

私はセブンスターの箱を手を取った。でも中は空っぽ。私は舌打ちして闇の中でもそもそも動いてタバコを探した。

すると、段ボール箱の中にタバコがぎっしりと入っていた。なんかよく分かんない錠剤もあったけど見て見ぬふりして、ライターを探しあてて火をつけた。

煙を吐き出す。ああ、私、なにしてんだろ。もう全てがわからない。私、これまで何していたっけ？ 愛が死んでから何もかもがわからなくなって、そして里奈を窓から落として、そして大地に会って。

これから、どうしよう。もう、何も出来ない。何もやる事ないよ。

愛が死ぬ前までは何してたっけ。そうだ、小説を書いていたんだ。愛が死ぬ前は、とても平和でほのぼのした青春小説を書いていた。そしてそれを応募した。

あれ、どうなったんだろう。結果知りたいな。そろそろ結果出るんじゃないかなあ。実は一次選考は通っていたのだ。最終選考の結果がそろそろ出る。

小説を書いて応募することが、唯一の私の存在を確かめることだった。でも、愛の人間以外には言わなかった。だって、小説を応募してますなんて言ったら、それこそ何あいつ夢見てるのバカじゃないのって言われて、西孤優菜は小説を書いて現実逃避をしていると言われてしまうから

。大人になんか絶対に言えない。大人は、子供が夢を持ってそれを語ると、わざとらしいほどに呆れた顔をして、「夢を見ないで現実見なさい」とか「そんな事出来るわけないんだから、勉強して会社に入りなさい」とかほざきだす。何故、会社に入る事をすすめて、あたかも普通の会社に入る生き方しか存在しないような事を言うのかわからなかった。私はとにかく、やりたい事がある子供に対して、ロクに話も聞かずその人のスキルを見ることもなく、とにかく普通の人生を歩ませようとする大人が嫌いだった。どうして真っ向から夢を否定して、バカにしたような顔をするのか本当にわからない。

そりゃあ、親だったらリスクの大きい道を歩むのではなく安全な道を歩んでほしいだろうけど、そういうの、ほんと、大きなお世話。

そのくせ、やりたい事がなくて悩んでいたら、何か一つくらいやりたい事を見つけろと騒ぎ出す。何もやらなかったらやらなかったで、夢を持ちなさいとか、夢を諦めるなどか綺麗事を語り出す。

夢を持つと呆れられる。夢見てる頭の痛い子と思われる。夢がないと夢を持ちなさいと偉そうに綺麗事を言われる。

そろそろ、いい加減にしろよと思う。マジでふざけんな。

でも、私の心の底には、夢を応援してくれる大人がいるんじゃないかと思う気持ちがある。ちゃんと話を聞いてくれて、その人のスキルをバカにしないで真剣にじっと見て、その上で応援してくれるような大人がいるんじゃないか。

応援をしながらも、大人として現実的に、夢がダメだった時の事も考えて対応してくれて、そ

れでいて夢を否定せずに肯定して認めてくれる大人がいるんじゃないか。どうしてかわからないけど、もう少し年齢を重ねれば、そういう大人に出会えるかもしれないと思っている。なんでだろ？

高校を卒業したら、そういう環境とか大人たちに、出会えるかもしれない。

でも、今の私の生活はどう考えても現実逃避だ。

現実逃避を永遠にすることは出来ない。ここでの生活がいつまで持つだろうか。

ていうか、大地はどこだろう？ そう思って小屋の外に出ると、大地は小屋の壁にもたれかかり、夜空の下で薬を吸っていた。私は大地の隣にしゃがみこんだ。

「大地。また薬やってるの」

大地はニタニタ笑いながら月を見ていた。

もしかして、私のせい？ 私といるのにうんざりして、もうどうでもよくなっているのかな。面倒なのかな。

でも、そもそも大地は私を女として見てここに連れてきた。今はどう見ているのかな。彼と少しいるだけで、案外ただイカれてるだけじゃないと思い始めてきた。

私になら優しくしてくれる。それで満足。そうだよ、別に全ての人に優しくされたいわけじゃない。大切な人に優しくしてもらえばいいんだ。

うん。そうだ。そのためには、やっぱり普通の生活を送るべきなんだ。でもその普通の生活っていうのは、別に学校や家で過ごすことじゃない。もっと、他の生き方だってあるはずだ。

そして大地に薬をやめさせよう。この人となら、私、なんとか地面に踏ん張って立っていられそう。

「ねえ。薬、止めなよ。頭おかしくなるだけだよ」

「あ？ 大丈夫だよ。マジでこれ、最高」

「ただの現実逃避だよ。ねえ」

「お前がそれを言うかよ。ここでの生活だって、ただの現実逃避だよ」

「そうかもしれない。でも、私と貴方の生活を現実に出出来ないかな。別に住む場所はどこでもいい。それに、私達もう少しで高校生になる。そしたら沢山バイト出来るよ。私、新しい道を考えてみたい。マスターの言ってた事も、なんか、頭から離れないんだ」

「里奈ってヤツのことはどうするの？ あれを片付けないと、お前は普通の生き方なんて出来ないぞ」

「間違っって落としたとか、適当に言う。とにかく殺意とか傷つける意志はなかったって言い張る。それに、私には小説がある。これで訴えていく」

「夢見てんじゃないよ。バカ」

私の頭に一気に血がのぼってきた。一番言われたくない台詞だった。

「な、何？ 小説書いている事が夢だって言うの？」

大地は慌てた様子で「違う、違う」と言った。

「里奈たちの事を適当にごまかしてまかり通るわけないだろ。お前、逃げてここにいるんだし。逃げたら悪気があったと言っているようなもんだ」

確かにそうだ。でも言われなくてもわかってる。誰かが私に味方してくれるわけじゃないけど、一人で頑張るしかないんだよ。だって愛はもう頑張ることも苦しむことも出来ないんだから。私がかくじけてしまったら、愛は永遠に報われない。

なんか、おかしいなあ。私が狂えば大地が助けてくれる。大地が狂えば私は心配してなんとか励まそうとする。

私が狂ってここで暴れた時、大地は必死になって助けてくれたのに、なんで薬なのさ。不安定なの？ 大地も、自分が何をしたいのかわからないの？

でも、分かってるよ。私はわかるよ。何もしたくないわけじゃないよね。ただ逃げてるだけじゃないよね。何かをしたいのに、何も出来そうにないから辛くて逃げたくなるんだよね。でも、大丈夫。私ら一人じゃないよ。

気持ちを維持出来ないんだよ、私達。朝起きたらどよーんとしていて、昼間は憂鬱な事を考えて、でも音楽を聴いたり本を読んだり、人と話していたら急にポジティブになる。でもすぐにその前向きな気持ちは、ちょっとした現実の辛さで壊れてしまう。薄いガラスに野球のボールを投げて割るように、悲しいほどあっさりと砕け散る。夜になると何故だか泣きたくなる。

浮いたり沈んだり。その不安定な自分に耐えられなくなる。大地だって、さっきは必死に私の腕を引っ張っていた。でも、今は薬でおかしくなって一人でひたすら笑ってる。

なんか、私も、嫌になってきた。だって、いくらポジティブになって新しい道を歩こうという気になっても、すぐに無理だと思って立ち止まっちゃうもん。

里奈を窓から突き落とさなければ、私はまだ普通の生活に戻る事は出来たのかな。でも私にとっての普通は、愛と二人で毎日を過ごして、学校行って、大人になることだ。それはもう叶わない。

「なあゆうなあ。薬、もっと、薬ほしいなあ」

「アンタ、ほんと、頭おかしくなるよ」

大地は、突然両腕を私の体にまわして抱きついてきた。

「ちょ、ちょっと。何よいきなり」

「優菜。俺、おかしいんだ。夜になると不安になって、寂しくてさ、変になるんだ。なあ優菜。俺と一緒にしろうぜ。なあ？ もっと、俺を知ってよ」

大地は頭を私のおなかにぐりぐりとおしつけてくる。

「ちょっと。くすぐったい」

大地はそのまま私の太ももに頭をちょこんとおいた。

その時、森のむこうに気配を感じた。

私は大地を引き離して外を確認しようとした。

「ん？ どうしたの」

「誰かいる」

「は？」

大地は舌打ちをすると立ち上がってあたりを見回した。

「……誰もいないよ？ 気のせいだろう」

「そうかなあ」

大地は頭をガリガリと搔くと、私の隣に座った。そして何か言おうとしたけど、溜息をついて小屋に戻った。

翌日の朝、私と大地は物音で起きた。

「ねえ、なんか、変な音しない？」

「んん？」

大地は完全に寝ぼけて目をこすった。

「なんか、小屋のまわり……」

耳を澄ますと、小屋がコツン、コツンと叩かれている。背筋がゾクっとした。体の下から血液がどぼーっと逆流していくような、とてつもない恐怖。ただ、物音がしているだけなのに。

「ここ、子供が出入りしてるんです」

さすがに私と大地は声を潜めた。おぼさんの声がある。そしてまた、小屋の壁をコツコツと叩く。

ヤバイ。これは不味いぞ。

心臓がはち切れそうなスピードで鼓動する。血の気がひいて、すーっと体が冷たくなる気がした。唾を飲み込む。

大地はつい数秒前までまた眠りそうな顔をしていたのに、事態をすぐに理解すると、素早く鞆の中に金を突っ込み拳銃を突っ込み、他にTシャツや携帯テレビなど必要なものを出来るだけ突っ込んだ。

そして鞆を手で持ち、百メートル走の選手のように構えた。私も紙袋に服を突っ込んで構える。

またごくりと唾を飲み込む。大地と目を合わせて頷き会う。目と目で通じ合う。

音が止んだ。入ってくるのか？ 入ってきたら一気にダッシュだ。後の事は何も考えていない。

汗がたれてきた。起きたばかりなのに、私は夜中と同じくらいに頭と体がはっきりと起きていた。

どうしよう。見つかったやつたのかな。こんなにあっさり、この生活が終わる事になるの？

でも今はそんな事考えている場合じゃない。今は、この状況を乗り切ることだけを考えるんだ。

「本当にこんな所に子供が？」

「ええ。そうなんです。うちの子が見たって……」

大人の声だ。私は舌打ちした。

「お子さんは？」

「旭岡中学に通っています。それで、この小屋の近くを最近うろうろしている二人組みがいるって……。なんだか、恐くて。こんな森の中で」

旭岡中学。もしかして、昨日の夜に私が感じた気配の正体は、旭岡の生徒だったのか。

「まあ、入ってみましょう」

私と大地は、よーいドンで走り出した。その瞬間にドアが開き、中年の男と女が視界に現れる。

「う、うわ！」

男の方は叫び声を上げながら尻餅をついた。女の方は叫んだまま動かないので、思い切り突き飛ばした。

二人で猛ダッシュ。後ろを振り向くと、不味いことに男の方が追いかけて来ている。めちゃくちゃ早い。

「ねえ、あの人、めっちゃ速いよ！」

尋常じゃないスピードで私達のすぐ後ろに近づいてくる。お前はボルトか。

「道路に出るぞ！」

「うん！」

「くっそ！ なんであいつあんなに速いんだよこの野郎！」

私達はなんとか道路まで出ると、歩道へと走った。信号は点滅している。私はギリギリでバスに乗り込み一時的にあの四人をまいた昨日の事を思いだした。

「走れ優菜。もっと速く！」

「わかってるってば！」

信号を渡りきって後ろを向くと、男は立ち止まっていた。赤信号になり車が走り出す。間一髪だった。

「は、走ってばっかりだな。ちきしょう」

「お、おっさん、速いね。何よアイツ」

私達は立ち止まってそう言い合うと、呼吸を整えてまた走り出した。そして入り組んだ住宅地に入り、駅の方へと向かった。入り組んだ道を通り公園を抜けたり家と家の隙間を通ったりしたので、男はすぐに見えなくなった。

大谷地駅まで行くと、私達は広場にあるベンチに座り込んだ。

「だー。疲れた！」

大地はベンチに思い切りよしかかった。朝から走ってもうぐったり。

「それにしてもどうする？ もう、あの小屋にいられないよ」

「うーん。正直困ったな。しばらくはネットカフェで泊まれるけどさ。それだとお金かかるし……」

ついに、こんなままごとも限界か。そう思ったのを見透かしたのかどうか分からないけど、大地は私の方を見ないで、小さな声で言った。

「なあ。優菜。俺はもともとこういう生活してたから、これからいくらでも何でも出来るけどさ、お前はどうする？ ずっと、俺についてくるのか？」

「何それ。アンタ、私がほしくて誘ったんじゃないの？」

「そ、それは……」

大地は苦しげな表情をした。どうせ、女の子との色々な生活を妄想していたんだろう。今はどんな目で私の事を見ているのか分からないけど、私は今の生活を続けたい。

大地はイカれてるけど、接してみれば結構普通の人なんだ。でも、あまりにもネガティブで自分を責める所がある。

「アンタは、一生このまま？」

私は、スタスタと歩いて行く人たちを見つめながら聞いた。

「うん。この生活を続ける。また新しく住める所を探すし、それが無理なら稼いだ金は全部ネットカフェに使うさ」

「でも、あんまりそういう所に入り浸っていると、いつか通報されるよ。家出少年がいるとか言われて」

「それはまあ、しょうがないけど……。でも、出来る所までやってみたい。なあ優菜。俺はお前と一緒にいたいのが本音だよ。でも、お前だけはまともに生きてほしいと思うんだ。里奈のことだって、詳しい事を説明すればそこまで責められることないよ。だってさ、あいつらは人をいじめて自殺に追い込んだやつらだぜ？ 学校は世間にいじめを隠しても、生徒はお前の味方をしてくれるよ。教師になんてどう思われたっていいだろ。でも、生徒はお前を敵視しない」

「でも、帰りたくないの。私は友達とほのぼのとした生活が出来ればそれで良かった。でも、それはもう叶わない。だって、今戻ったら死ぬほど面倒な事になるよ。嫌なの。そんなの私の望んだ人生じゃない」

「望んだ人生か。……ていうか、なんで俺達逃げてるんだろうな。里奈の取り巻きから逃げて近所の人から逃げて。俺達、何も悪くないのにな。ただ普通にしていただけなのに、勝手に周りが普通の生活を奪ってさ」

大地は大きな溜息を吐いて続けた。

「俺、友達が多いんだ。でも、なんか、疲れる。教室ってさ、俺みたいなやつには向いてないんだよ」

「どういう事？」

大地はよっこらせとベンチから立ち上がると、のそのそ歩いて自販機でコーヒーを二つ買った。そしてベンチまで戻ってきて、缶コーヒーをしゃかしゃか振りながら言った。

コーヒーを渡されたので、受け取って一口飲んだ。

「うえっ」

「どうした」

「これ、ブラックじゃん」

「ブラックだよ」

「アンタ何考えてんの。私、今怒ってるわ」

「言葉で露骨に怒りを表わされても」

「私はブラックだめなの。アンタのよこしなさい」

私は大地からコーヒーを奪い取った。缶を確認して飲む。うん、おいしい。コーヒーはこれくらいの苦さが丁度いい。

私はブラックの缶コーヒーを大地に渡した。

「で？ 話の続き」

「……俺、要領悪いんだ。友達が多いけど、すぐにいなくなる。そしてまた新しい人と仲良くなる。その繰り返し。なんていうかさ、続かないんだよ。最近まで仲良かったあいつ余所余所しなくなったなあとか、昔はあいつらとグループになって遊んでたのに、最近はめっきり話さないな

あとか。多分、俺が個性とか素を出し過ぎなんだと思う」

「そんなもんじゃない？ 人間関係なんてそんなもんよ。皆、出会って仲良くなっても、ほとんどの場合は永遠にこの人と付き合いが続くんだろなあとか思わないよ。でも、私は愛と永遠だと思ってた。愛以外にも、この子とは高校生になっても大人になっても、なんだかんだいって付き合い続くだろなあって子は何人かいるよ。でもさ、永遠に、年寄りになっても絶対に一緒にいるんだなあって思う人とはそんなに出会えないよ。私達まだ中学生で出会いとかも限られてるし。それに、ずっと付き合いが続くんだろなあっていう人とは、何年も一緒にいて、やっこの人とはずっと一緒にいるんだろなあって本能的にそう思うんだよ。案外、めちゃくちゃ仲良かった人とクラス別になっただけであっさり付き合い無くなって、そんなに仲良くない人とグループ繋がりとかで長く付き合う場合もあるじゃん？」

大地はうーんと唸った。コーヒーを少し飲んで、舌で唇を舐めた。

目の前を親子が通った。親は三十代前半。子供はまだ小さく幼稚園くらい。母親は、何故かベンチに並んでいる私と大地を見て一瞬微笑ましい顔になった。

「子供は可愛いなあ。……なあ優菜。お前はそう言うけど、俺みたいに不器用みたいなヤツはいるんだよ。誰とでも深い付き合いにならない。出会った時は遊ぼうとか沢山言ってくれていたのに、すぐにそっけない態度で接してきたりさ。俺そういうのに疲れたんだ。いじめられた経験はないけど、空気を読むのは面倒だった」

「どういう事？」

「例えば自分含めて友達四人と話していてさ、俺以外の三人がA君の悪口を言い出す。でも俺はA君と仲が良い。でも、三人は当然俺に同調を求めてるだろ。そしたら、やっぱり俺は笑ってA君の悪口を言わないとダメ。あと、些細な嫌味とか皮肉に気づかないふりして笑ってごまかすのも辛い。でも、そういう嫌味とか皮肉を笑ってうまく流していると、あいつは嫌味や皮肉を言われても、バカにされている事に気づかないアホだとか陽気な奴だとか言われるじゃん。脳天気で気楽なやつだと勘違いされるじゃん。そういうのすっげ一腹立つんだよ。マジで疲れる。やってらんねーよ。教室は本当に檻だよ。あんな狭い教室に四十人も押し込むのが間違ってるんだ。さあ皆さん戦ってください！ って言っているようなもんだよ。教室で授業を受ける前に、教室でうまく生活するための授業をする教室が必要だよ」

教室は檻。だったら、里奈たちはライオンで、愛は可愛いリス。勝てるわけがない。そして私は、何も出来ずに上から動物たちを眺めている鳥。何も出来なくせに、エサだけはきちんと食べる。

「うん、そうだよ。なんか、どうでもいいよね。よくわかんないけど、どうでもいい」

「ああ、そうだよ。どうでもいいんだ。学校なんて。今の時代だからこそ、無理して学校行ったり働いたりする必要無いよ。好きな事だけやりたい」

「好きな事ねえ……。好きな事だけやれるほど、人生甘くないでしょ」

「まあ、そうだけさ。で、優菜。小説は書かないの？」

私はコーヒーを全部飲み干して、近くにあるゴミ箱に放り投げた。

「書けないよ。こんな状況で。つーか、パソコン置いてきたじゃん。今頃小屋の物は全部回収さ

れてるよ」

「もう、時間の問題か……。俺達、ただのワガママなのかな。俺達は中二病とか、現実見えないガキとか、そういう言葉で片付けられちゃうのかなあ」

「人は冷たいからね。里奈の手下達は、今の子供を大げさに象徴したようなもんだよ」

「どういうこと？」

「皆、自分と自分の友達にだけ優しくて甘いんだ。でも、嫌いな子やどうでもいい子に対しては、突然笑顔を崩して睨みながら悪意を吐き出す。可愛くておとなしい子でも、裏では嫌いな人や少しでも気に入らない人に対してボロクソ悪口言う。そういうのは、まあ人間だからしょうがない。でも、それがネットのせいで文章として残ってしまう場合もある。里奈たちは自分たち五人だけが世界の規律だとか思ってるのよ。自分と自分の大切な存在が良ければそれでいい。だから嫌いな奴は死んでも良い。自殺するまで追い詰めても構わないと思ってる。嫌いな人に対する文句を文章として残す。でも、自分達は大切だから、自分達が攻撃されるとキレる。理不尽だと暴れる。そして傷つき自分に酔う」

大地は大きな溜息を吐いて天井を見上げた。そしてコーヒーを飲み干すと、唇を手で拭いて、小さな声で言った。

「優菜。遠くへ行こう」

「遠く？」

「ああ。つってもそんなに遠くには行けないけどさ。そうだなあ……。田舎に行こうぜ」

「田舎かあ。例えばどこ？」

「札幌の近くだと……。余市か、夕張か、長沼か……」

「田舎すぎない？ 何気にちょっと遠いし」

「うーん。じゃあ、千歳でも行くか。そうだ、千歳が丁度良い」

「行った事ないからわかんない」

「良い所だよ。中心部に行けばそこそこ店はあるし、何より自然が沢山ある。最近では森を壊して住宅地とか開発してるけど、それでも森が沢山ある。誰にも見られずに生活出来る場所なんて、沢山あるさ」

「ふーん。よくわかんないけど、確かに札幌にいるよりかは、他の所に行った方が良いかもしれない」

「うん。じゃあ、早速行こうぜ。千歳に行こう。札幌から出るんだ」

大地は大谷地駅の目の前にあるコンビニでお金をおろした。ネットで稼いだお金が予想以上にあったらしく喜んでいた。

遠く。と言っても千歳だけど、知らない土地に行くのは不安だけどワクワクする。

私達は地下鉄の中でガタガタと揺られている。札幌駅から千歳に行くんだ。

「優菜。千歳で何する？」

「知らない所で、文章を書きたいな」

「そっか。俺はしばらくまったりしたいな」

「そうだねえ。アンタ、新聞配達でもすれば？」

「それもアリだな。そうすれば、少しはこういう生活も長続きするかも」

いつか、元の場所に戻ってしまうという事は分かっている。でも、その事は考えないでいる。今が良ければそれでいい。

「ねえ大地。千歳に飽きたら、また遠くへ行く？」

大地は、携帯ゲーム機に熱中している女の子の乗客を見つめながら言った。

「それもいいね。北に行く？ 南に行く？」

「南に行こう。だって、北に行ったらすぐに端っこに行っちゃう。南へ行けば、まだまだ長い道が続く」

「わかった。じゃ、千歳の次は函館あたりでも行くか」

「そうだね。夜景みたいだな」

白石駅を過ぎてバスセンター前を過ぎて大通り駅につく。扉から無数の人々が吐き出されていく。

そして東豊線に乗り札幌駅まで行くと、私達は人混みの中をゆっくりと歩き、改札を通り、そして二人同時に止まった。

「ねえ大地」

「なんだ」

「どうして止まるの」

「お前こそ、どうして止まる」

「いや、だって……」

「言いたい事はわかる」

「じゃあ、なんで止まったか言いなさいよ」

「いや、お前が言えよ」

「嫌よ」

「優菜」

「なに？」

「千歳ってどうやって行くんだ？」

「こんな事で子供という弱さを感じるなんてやるせないわね、マジで」

駅員に聞いて千歳線に乗ることを教えてもらい料金も確認する。JRに乗るのは久しぶりだ。

私達は電車が来るまでベンチに座って待つことにした。

遠くへ行けば行くほど、後ろめたい気持ちに襲われる。私は千歳に行き、苫小牧に行き、室蘭に行き、長万部に行き、そして函館まで行こうとしてる。無数の手が私の背中を捕まえようとして、でもその手を振り払い、いつしか追ってくる手さえ見えなくなって、後に残るのは無数の溜息や冷たい目。私を見放さないで。

でも私は自らの意志で遠くへ行こうとしている。なんか、疲れたな。もう、心の浮き沈みが心の重荷になってしんどい。どうせならアホみたいにポジティブ一直線になるか鬱病になるかハッキリしてほしい。

とても幼稚な事をしているような気がする。実際、そうなんだろう。

やっぱり、里奈を突き落としたのが全ての間違いだった。もし里奈を突き落とさないでなんとか踏ん張って学校に通って、それで大地と出会えたら、まともな生活をしながらなんとか新しい道を探せたかもしれない。

でも、愛をいじめて自殺させてそして私にもあんな事をして、そして謝罪を要求されて、どうして黙ってられる？ あの時私は黙って謝ってればよかったの？ それは表面的には正解だろうけど、それじゃあ世の中あんまりだと思った。人が死に、私は紙くずを突っ込まれ拳銃を突きつけられているのに泣きながら謝る。そんな世の中認めない。数の力で好き放題やり人を地獄に追いやる人間がいつまでも笑って生きていて、愛が死に愛の親友の私が愛をいじめた奴らに謝るなんて、絶対にそんな事あっちゃいけない。でも世の中の仕組みは、とても理不尽なんだ。

そうだ。世の中は理不尽なんだ。世の中そういうもんだ。学校ではイケメンや可愛い子が青春を謳歌できて、いじめのターゲットにされた者や自己主張の苦手な者は生きづらい日々を送ることになる。

学校での人間関係や仕組みは、世の中の全てを反映している。強いものが甘い蜜を吸い下のものをさんざんバカにして笑い合う。自分が良ければそれでいい。それが世の仕組みなんだ。

でも、私だって自分だけが良ければそれでいいと思ってる。愛と二人でいて、他にも仲の良い人を見つけて、小説を書いていられればそれでいい。里奈達が生きていようと死んでいようとそれでいい。自分だって、結局自分と大切な存在だけが良ければそれでいい。

だからって、里奈達みたいに露骨に態度にあらわす人は普通いないんだけどね。里奈達は悪い意味で特殊なんだ。

大地の横顔を見てみた。難しい顔でじっと一点を見つめている。

今できることは、お互い突発的に狂って暴れないようにすることだけ。でもそれっておかしい。なんか上っ面みたいで嫌だ。どんなに笑顔で話してもどこかでおびえている。大地とまでそんな関係になってどうする。

大地の事をまだハッキリと分かってない。最初に会った時のイメージが強すぎるんだ。

うるさい音を立てて電車がやってきた。私と大地は無言で立ち上がった。さよなら、札幌。電車に乗り込む。ああ、本当に、やっちゃった。

三十分ほどで千歳駅についた。案外はやい。千歳なんて始めて来たから当然土地勘ゼロ。

「ね、ねえ大地。どこに行くの？ アンタ、千歳分かるの？」

「ああ、俺のじいちゃんが千歳にいてさ。だから、土地勘はある」

もしかしたら、大地はいざとなったら祖父を頼ろうとしていたのかもしれない。結局、大地は大人の力がどこかに無いところの怖いのだ。自分一人で何かを出来る自信がない。

駅から出ると、なんだか中途半端な所に出た。ビルなどの大きな建物は少ない。大きくてどこまでもまっすぐな道路があって、遠くには森が見える。畑も見える。そして駅近くにはポストフルやゲオなどの店がぽつんぽつんと、空から適当に投げて置いたように建っている。

「千歳は田舎だけど良い所だよ。自然はまだ沢山あるし、なにより支笏湖がある。落ち着いたら支笏湖にでもいっか」

「支笏湖なら私も知ってるよ。行ってみたい」

大地は笑顔で頷いた。支笏湖か。見てみたい。知らない土地で、色々なものを見てみたい。

大地はスタスタと歩き出した。

しばらく歩くと住宅地に出た。とても閑静で静か。そしてまた住宅地を抜けて広い道路に出ると、私は呆気にとられた。

戦車が、普通に道路を走っている。テレビでしか見た事のない戦車が、普通に目の前を走っている。

「ね、ねえ大地！　せ、戦車が道路走ってる。せ、戦車だ！」

「ああ、走ってるな」

「なんで？　どうして？　まさか日本ついにどこかと戦争するの？」

大地は苦笑いしながら答えた。

「違うって。あれ、戦車道路。別に驚く事じゃない」

「な、なんか物騒……」

私がそう呟くと、大地は眉間に皺を寄せた。

「たかが戦車で騒ぐな。それに戦争が起きたら戦わなきゃいけない。戦車は必要だ」

「だって信じらんないもん。戦車とか戦争なんて……」

「あのさ、優菜。もう少し危機感持ちなよ。日本は超大国に挟まれてるアジアの国なんだけ。もし世界的な戦争が起きたら、今の日本なんて一瞬で破滅だ。どんなに技術力があって凄い兵器があっても、大国のバリバリ現役の軍人に攻め込まれたら、どうしようもない。つーか、沖縄の基地にいる米軍たちと喧嘩しても負けるかもしれない」

「なんかピンとこない」

大地は頭をガリガリと掻いた。

「あのさあ、世の中っていうのはいつ何が起きるか分からないんだよ。そこを皆わかってない。ぬるま湯に浸かってる。必死に生きることができないっていうか、必死に生きなくてもなんとかなる世の中になってるっていうか……」

大地がそう言うと、後ろから「うんうん、そうだ」というつぶやきが聞こえた。私達は「

うわあ！」と叫んでベンチから立ち上がって振り向いた。

ベンチの後ろに、腰の曲がったおじいちゃんがいた。

「兄ちゃん、よくわかってるね」

なんだ、この爺さん。

「私が若いころは、皆生きる事に必死だったよ。でも、今は生きる意味や目的が無いと言って、死んじやいたいと思う若者が多いだろう」

とりあえず、頷く。

「つまりね、昔の人は生きる事そのものが生きる意味であり目的だった。死なずに頑張ってる事が人生の全てだったんだ。でも、今の人はずもう生きてる事そのものを人生の意味や価値や目的だと思わない。生きる上で何をするかで、自分の意味と価値を決めてしまう。でも、兄ちゃんはよくわかってる。死というものは確かに生きてるうちは良くわからないけど、そういう気持ちを持つことは大切だ」

おじいちゃんはそう言うと、満足そうな顔をして立ち去って行った。

生きる事そのものが生きる意味であり目的である？ どういう事、それ。だって生きてる事は当たり前じゃん。生きる事に人生の意味と価値を見いだすっていうの？ 全然分からない。

じゃあ、それなら愛は、人の手で人生の意味と価値も全て奪われたって事？ そんなのあんまりだよ。

でも、今のおじいちゃんの話だと、私はただ生きてるだけで価値があるのかな？

コロポックル・コタンのマスターの話を思い出す。若さを取り柄にして生きて。私は若い。生きてる。それで満足出来ないのかな？ それだけじゃ満足出来ない世の中なのかな？

確かに、面倒だもんね。色々なことが自分に降りかかる。それなのに、生きる事だけに価値を持って目的とするなんて、無理だよ。そんな事したら生きていけない。周りに置いていかれる。そういう時代なんだよ。

「生きてる事そのものに意味と目的がある、か……」

大地はそう呟いたきり、無言で歩き出した。私も何も言わず後についていく。

生きる事に意味や価値や目的がある？ でもね、おじいちゃん。そんな甘い言葉が通用する時代じゃないんだよ。

じゃあ、おじいちゃん、愛の事はどう説明するの？ 愛は生きていて何か価値を見いだせたの？ 死んで何か目的を果たせたの？ あの子の人生に何か意味はあったの？ 私と愛の素晴らしい思い出が愛の生きてきた意味と価値の証だよとか、そんな綺麗事は許さないよ？

大地は歩き続ける。やがて、住宅地から外れて、永遠に続いているんじゃないかと思うくらいにまっすぐな道路に出た。ひたすらに道路が続いている。車は一台も通っていない。両端にはひたすら畑が広がっている。

私達は歩道から外れて道路の真ん中に立った。まっすぐ視線を向けると、永遠に続く道路。そして青空。雲はほとんどない。首を横にふれば、ただ畑だけが広がっている。

強い風が吹く。肌が心地良い。そよそよと、風が私の体をまるで母親が赤ちゃんを撫でるように優しく包み込む。

私達はどちらからともなく手をつないで、車も人もいない道路をゆっくりと歩いた。このまま、ずーっと、この道路を歩けたらいいな。疲れたら道の脇で休憩して、また歩き出す。青空はずっと青空のまま。畑がずっと広がる。道はどこまでも続く。とても開放的な気持ちだった。土の匂いが心の汚い部分を覆い隠してくれそう。

しばらく歩くと、道に脇に小さな小屋があった。本当に小さな小屋で、小屋の表の部分は上半分に壁がなく、中に若い女の人がいるのが見える。小屋の隣には小さな柵があり、柵の中にはなんと牛がいた。

「なに、あれ？　なんであんな所に牛がいるの？」

道路の脇には畑や、その畑の持ち主と思われる小さな家がぽつんぽつんとあるだけなのに、突然畑の横に小屋と牛。変だなあとは思ったけど、何故か違和感は覚えなかった。妙にこの空間にマッチしている。

「アイスの家だよ」

大地はそう言うと小屋を指さした。小屋には「アイスの家」という小さな看板がかけられていた。

「へえ。あれがアイスの家かあ。ねえ、買って買って」

大地は私の頭を優しく撫でると、小屋の前へと歩き出した。

小屋の目の前まで行くと、若いお姉さんが笑顔で「いらっしやいませ」と大きな声で言った。レストランなどで見る営業スマイルではなく、心から客が来た事に喜んでいるような笑顔だった。

「デートかしら？」

「へ？」

お姉さんは注文も聞かずにそう聞いてきた。リスのようにくりくりした瞳で私と大地を交互に見る。

私達が黙っていると、お姉さんは「純粹ねえ」と嬉しそうに言った。

「あ、えっと。何味があるんですか？」

大地がそう聞くと、お姉さんは答えた。

「バニラ、チョコレート、夕張メロン、ミックスもあるわよ」

「何にする？」

「うーん。夕張メロン味」

ここ、夕張じゃないけども。私達は夕張メロン味のアイスを二つ注文してお金を払った。お姉さんはすぐに機械でアイスを作り、小屋の中から手を伸ばして渡してくれた。

「これ、そこの牛のミルクで作ってるんだよ。超おいしいわよ」

私は舌でぺろっと舐めてみた。とても濃厚な味が口中に広がる。メロンの風味が最高。

「凄い！　めっちゃ甘い！」

私はぼーっとしている牛さんに感謝した。ありがとう牛さん、こんなおいしいアイスを作ってくれて。

私達はアイスを手に持ちお姉さんに礼を言って、また歩き出した。

また、まっすぐの道を歩き出す。優しい風を感じながら、歩く。

「優菜。住む場所、どこにしようか。この近くに、なんか住めそうな所は……」

そんな現実的な事を言い出した。大地はそういう所で現実的。私は変な所で理想的。

「いいじゃん。このまま歩こう」

私がそう言うと、大地は歩くのを止めた。まるでこれ以上歩いたら行ってはいけない所にたどり着いてしまうかのように、悲しそうな顔をしていた。

「でも、このまま歩いたら……」

「いいよ、歩こう」

私はまた歩き出した。大地はわざとらしく溜息を吐いてついてくる。

そして、数十分歩くと徐々に車の量が増えてきて、大きな建物も見えてきた。更に歩くと、ついに国道に出た。

あーあ。ここまで来ちゃった。気づいたら空もオレンジ色に染まってきている。夢の終わり。

「とりあえず、今日はネットカフェに泊ろうか」

大地はそう言って、ネットカフェを探し出した。しかし国道をいくら歩いてもネットカフェが見つからない。

「他の場所行くか」

国道からそれて小さな道に出ると、住宅地に出た。ひたすら歩いて何か無いかと探していると、すぐにどんどん家の数が減ってきて、高校が現れたと思ったら端っこに来たらしく、森が広がる所に来た。

「俺達、森が好きなのかなあ」

ここまで来ると、家の数も数えるほどしかない。後ろを振り返ればまだ家はあるけど、なんだか寂しい所だった。

ただ、森の前には民家が一軒。そして物置が建っている。

「物置か……」

「まさか、アンタ」

「あるもんだな、こういう所」

大地は民家へと近づいた。その家はボロくて小さな家。車庫に車はとまっていなかった。

「ちょっと、怪しまれるよ」

「大丈夫だよ。ネットカフェにお金を使うより、やっぱり住む場所を見つけた方がいい。お金も底をつきてきたし」

大地は家のまわりを物色し始めた。

「人住んでる気配ないなあ」

「わかんないでしょ、そんなの……」

「もうちょっと、先行ってみよう」

大地は更に奥へと行った。

森に沿ってどんどん歩くと、更に寂しい所に出た。遠くに家が見えるけど、本当に何も無い。全く手をつけられていない土地が広がっている。

ここだけ、取り残された場所に思えた。

「疲れた。もう歩けない」

「俺も疲れちゃった」

私達はさっきの家まで戻ると、もう何も考えずに物置を開けた。たてつけが悪く開けるのに苦労した。中は結構広くて、物は特に何も入っていなかった。

「金もないし、ここでお世話になるか」

一日くらいなら、大丈夫かな。家の人が帰ってきたら、こっそり逃げよう。この物置は使っている様子がないし、物置を開けられるようなことはないだろう。

物置に入りドアを閉めた。中は真っ暗。大地は鞆の中から懐中電灯を取り出した。

「アンタ、そんな物入れてたの」

「ああ、逃げる時に入れてきた。俺、ああいう時は頭が回るんだ。他に大量の電池。携帯テレビ。服も少しだけど無理矢理詰め込んだよ」

大地は懐中電灯の電源をつけて床に置いた。光りがまぶしい。そして、じりじりと私の隣に近寄ってきた。私は大地の肩に頭を置いて、大きく息を吐いた。

大地は私の髪の毛を口に咥えて舐め始めた。ざらざらした感触で私は背中がゾクゾクとした。

「ねえ、大地。薬も持ってきたの？」

「うーん。丁度全部無くなってたからなあ」

「ていうか、あの薬誰から買ったの？」

「高校生の知り合いがいてさ。そいつから買った」

「不良？」

「いや。別に、普通の人。ていうか、そのあたりにいる不良の中高生なんて、ただのワガママなガキだよ。不良って教室に何人かはいるもんだけど、ほとんどの奴らは一人じゃ何も出来ないただの調子こいたガキだよ。で、そういう奴らは基本的にチキンだから、薬なんてこわくてやらないのさ」

「なるほどね」

沈黙が続いた。大地はひたすらに私の髪の毛を咥えている。

これからどうしよう、マジで？

今の私って、何なんだろう。なんていうか、今はもう死んでいるのと同じような気がする。さっき、おじいさんは生きるだけで意味があるとか言ってたけど、じゃあ今の私と大地の生き方には意味と価値があるの？

結局、用意された常識というレールの上で生きなきゃダメなんですよ。学校に通わないと冷たい目で見られるだけ。例え学校が死を招く場所だとしても。

そりゃ、生きるのは大変ですよ。

でも大多数の人間は、それぞれ悩みとか不満はあれど、人並みに普通に学校に通って友達と笑いあって楽しく過ごしている。私と大地みたいな子供は当然とても希なケースなんだよ。私の友達は何人か自殺して、大地の親は人を殺した。そんな境遇にいる人の気持ちなんて誰もわからないよね。

私は大地の鞆から拳銃を取り出した。右手で握りしめて大地の顔に向ける。

「なんだよ、いきなり」

「バーン！」

大地は笑いながら、拳銃をつかんで床に置いた。

「この国、拳銃必要かな？」

「政治家が必要だと言ったら必要っていうことになるんじゃない？」

「うん。でもさ、これって肉体的に守るって事でしょ。私達が守らなきゃいけないのは、肉体よりも精神でしょ？ 政治家って、なんかいつもどこか決定的にズレてるよね。本質的な問題を無視して、直接的な事ばかり。お金ばらまいたり高校無料にしたり拳銃持たせたりさ」

「うーん。しょうがないだろ。政治家といえどもただのおっさんだし、人の気持ちを全て理解して何かやるっていうのは、難しいと思うよ」

「そんなもんかなあ……」

「わかんないけどね。ていうか話変わるけどさ」

「うん」

「お前、付き合った事あるの？」

「突然何さ。……無いけど？」

「そうなんだ」

「アンタは？」

「無いよ」

「ふうん」

大地は突然私の顎を手でつかむと、自分の顔にぐっと近づけた。寂しげな目が私を見つめていた。

私は特に何の感情も抱かずに、気づいたら唇を奪われていた。ただ、体に力をいれずに唾液を口の中に入れられ続けている。

それに張り合いを感じられずに萎えたのか、大地はすぐに唇を離した。

「どうしたんだよ」

「どうしたって言われても」

大地はイライラした顔になると、鞆からショートピースを取り出して一本口に咥えた。

「お前、ずっと俺といてくれるの」

「貴方と一緒にいられなくなった時は、私達の現実逃避が終わる時だろうね。誰かに見つかって保護されるとか。私の親が捜索届け出すとは思えないけど、このまま何事もなく終わるわけはないだろうしさ」

「まあ、確かにそうだけどもさ……。俺、お前と一緒にいて思ったんだけど、優菜と二人で普通の生活もしてみたいな」

「普通って？」

「会った時に言ったかもしれないけど、俺不登校じゃん。でも、普通に学校行って、学校帰りお前と待ち合わせしてどこかで遊んで。学校なんてクソだけど、学校以外にまともに生きる道は無いから、しょうがなく学校に行く。でも、優菜と会えるんだと思えば耐えられる。休みの日には、優菜と映画に行ったりおいしいもの食べたりさ。あと、毎日メールするとか、優菜とならそう

「いう普通の人生でも満足出来るかもしれない」

大地の方が、どんどん現実的になっていってる。最初はズレた事ばかり言っていたのに、どんどんまともな道を歩こうとしている。なんだか私は悲しくなった。

私の方が最初は現実的だったはずなのに、気づいたら私の方が理想的でおかしくなっている。どうしたのかな、私。全てが本当にどうでもよくなってきたのかな？

「普通かあ。アンタ、家にいた時はどんな生活してたの」

「うーん。ネットやったり漫画読んだり本読んだり。特に何もしないで、ぼーっとしてたよ。テレビは見なかったけど」

「私もテレビは見ない。なんか、テレビってつままないもん。こういう番組やるときや妥当だろ的なノリがうざい」

大地は何度も頷いた。

「それもあるけど、俺がテレビを見ない理由はちょっと違うかな。なんかさ、大人達がすっごい楽しそうに笑ってて、なんか、凄い嘘くさいんだ。テレビに映っている映像と自分のいる世界と比べたら、テレビに出ている人達の方がおかしく見える。全く違う世界に見えるんだ。でもそれは芸能人と一般人の違いとかそういう事じゃなくて、世の中の汚いところとか見せないようにしてるっていうか、とにかく嘘くさい」

「なんとなく、分かるかも。どんなにテレビで笑顔を浮かべていても、裏では何してるか分からないのにね」

「うん。特に、若い人に対して語っている映像は死んでも見たくないね。だってさ、大人達って、あたかも俺達子供が綺麗でいる事が当たり前みたいに思ってるじゃん。中高生が体の関係持つわけ無いとか、人を死に追いやるほどのいじめをするなんて信じられないとか、中学生くらいの年齢で夜の街で遊ぶわけ無いとか、結構マジでそう信じ込んでるじゃん。バカな事言ってるなって思う。もう勝手なイメージを子供に押しつけるような事はやめてほしい。そして子供が自分の思い通りにいかなかったり、自分と全然違う事を考えていたりすると暴言と暴力で押しえつけるのにはうんざりだ。それなのにテレビでは大人の一方的な意見がまかり通ってる。本当に失礼だよ。子供が、大人の思い描くような日常を三百六十五日送っているわけないだろう。それなのに、しつこいようだけど大人って勝手なイメージを子供に押しつけて、子供が自分達のイメージと違う道へ向かったら、子供達に今何が起きているのか？ って語り出す。本当に、バカくさい。いちいち子供の間で何か事件があるたびに、アホみたいに口開けて驚いたり難しい顔して語る姿を見るの、本当に嫌なんだ。何も知らないくせに」

「確かにねえ。何も知らないよね、あいつら。……って当たり前なんだけどもさ。子供が大人の世界を知らないように、大人も子供の世界を知らないよ」

大人は遅いんだ。ネットでとても流行っている事があってそれが若い人の間で当たり前になっていて、しばらくすると突然マスコミが「今こんな事が流行ってます！」って騒ぎ出す。私達からしたら「今更何騒いでるの？」って感じ。

何より、プロフィールサイトの問題がマスコミに取り上げられたときは、あまりにも今更すぎる問題を、あたかもつい最近起こり始めた事のようにとらえて騒いでいる大人達の姿が衝撃的だった。何、今更騒いでるの？ って

プロフィールサイトなんて、いつ始まったかわからないほど昔から当たり前だったのに、いきなりマスコミがこういうサイトが原因で、暴言が沢山書き込まれて問題になっていきますと真剣な顔で語り出す。

別にそれはマスコミが悪いわけでも何でも無いけど、それをニュースで大々的にとりあげて、あたかも最近問題になったかのように報道する。でも、それ、嘘。私達若い人からすれば笑っちゃうくらいに遅い情報。

遅いだけならいいけど、それを中途半端に報道して大人達は真剣に語り合っている。その話し合いや意見は全てズレている。そしてどれだけ話しても、結局「子供の間には闇が蔓延している。いったい子供達に何が起きているのだろうか？」みたいな形で終わる。アホ丸出し。世の中全てがおかしいと、何故言わない？

だから、テレビに出ている大人達が私には嘘に見える。綺麗事を平気で並べたり努力をすれば必ず報われるとか、そんな言葉をだらだらと述べるし、バラエティ番組で才能が全く無いのに歌を出したり、やっぱり才能無いのに親の七光りでやりたい事やりまくっている芸能人の姿を見ると、本当にやるせない気持ちになる。世の中、そんなもんですか？

テレビだけじゃなく、上っ面とか、誰もが嘘と分かりきっている事でもその嘘をぺらぺらと言いつ切る姿はもう見たくないんだ。

「世の中、大したことないな」

と、大地が突然呟いた。

「確かに、大したことないね。なんか、どうでもいいよね。くだらない」

「うん。どうでもいい。でも、俺は優菜といれば、そんな世の中でも生きていける気がするなあ」

「綺麗事は止めて」

「そんなんじゃないさ」

大地は私の頭を優しく撫でた。そして拳銃を親指で突くと、言った。

「お前、拳銃で人殺せる？」

「人なんて殺せないよ」

「でも、里奈が誰かをいじめて殺そうとしてたら？ その時お前の手に拳銃があったら？」

「……撃つかもしれない」

「だろう。でも、撃つてしまえばお前は殺人者。そして里奈はかわいそうな被害者になる。でも、人の心の話をするれば悪いのは里奈だ。でも、撃ったら終わり。世の中、意味わかんないね」

「うん。結局、強い者の言った事が常識になるんだよ。下にいる人達がどんなに騒いでも上の人が黙れと声を荒げれば、正論はかき消される」

「うん。くだらない。だから、俺はそういう世の中からドロップアウトしたいと思ったんだ。親は人殺しちやっただし。もう捕まったかな？」

「さあ。大地はずっとこういう生活を続けるの？ 何かやりたい事とかないの？」

「やりたい事か。今の所ないな。でも、やりたい事探せるような状況じゃないよ。親の事もそうだし、俺自身がもう世の中に絶望しちやってるし。もう手遅れ」

「まだ、ギリギリ間に合うんじゃない？ マスターだって言ってたじゃない。若いだけで素晴らしいって。なにも普通の会社員になるとか、そういうまともな事じゃなくてもいいよ。自分が生きていける場所、探そうとは思わない？」

「面倒なんだよな、全てが。何もかもが成功する気がしない。お前は小説を書くんだろう」
なんか、大地はさっき自分で言ったことと矛盾するような事を言い出した。

「うん……。でも、小説を書ける場所がどこにあるかわからない。文字を書ける世界がどこにあるか探さないと。今の私、死人と変らないから。自分が分からない」

「そっか……。でも、今の俺達、ただ逃げてるだけで、何もしてないよなあ……」

大地は悲しげな顔をしながら、ぼーっと天井を眺めた。どこを見てもただ暗いだけ。懐中電灯の光りがうっとうしく思えてきた。

「なあ、もっと、色々な事やろうよ」

「色々って？」

「だから、ほら」

大地は強引に私の肩をつかんできた。そのまま大地の胸に頭をコツンと押しつける格好になる。

「俺達、まだ十四だけど、気づいたら大人になっちゃう。そしたらすぐに体が痛くなったり皺が出来たりする年齢になっちゃう。そうなる前に、色々な事やっておこうよ」

大地はそう言うと、歯を見せて笑った。私は自分の長い爪をじっと見つめて、大地の前歯の間に爪を食い込ませた。そして指を大きく上にふると、反動で大地の頭がカクンと後ろに垂れた。

「おい」

大地は私に顔を近づけて睨んできた。私は大地の上唇をつかんで、また爪を前歯の間にはさんで、指を上につた。また、頭がカクンと後ろにはねる。面白い。

「お前、何がしたいんだ」

大地は私の頬を人差し指で突いた。

「なあ、俺の質問に答えろよ。なあ、やっぱ、若いうちにさ……」

私は自分の人差し指を見てみた。べたべたしてる。それを舌で舐めとった。

「やるの、面倒くさい」

私達はそのまま物置で寝た。我ながら、良い度胸していると言うべきか、それともただのアホなのか。

「大地、もう朝だよ」

そう言って気がついた。大地がいない。物置から出てまわりを探しても、どこにもいない。どこに行ったんだろう？

物置の中に戻ると、私はとんでもない事に気がついた。大地の鞆がない。ただ、床に一万円札が一枚と、千円札が三枚と、百円玉が五枚。そしてお金の横には一枚のメモ用紙。そして、グロック十七。

どういう事？ ねえ、これ、どういう事？

私はメモ用紙を手を取った。汚い文字で何か書かれている。文章は短かった。声に出して読んでみる。

「札幌に戻れ。学校にも戻った方がいい。茂師理大地」

……は？

意味がわからない。どういう事さ。なんで、いきなり消えちゃうの。ていうか、私を誘ったのはアンタじゃない。

何よ。ここまでしておいて、あとは一人で帰れって言うの？ ふざけないでよ。どうして、私を一人にするの。

心がまた寂しくなった。愛。愛はどこにいるんだろう？ ねえ、やっぱり私は一人みたい。愛がいなくなってから、本当に寂しいんだ。

そして、大地までもどこかに行っちゃった。なんで？ ねえ、誰か、誰かいないの。私はどうしてこんな所にいるの。どうして物置で寝てるの？ このお金は何。なんなの。このお金にはどういう意味が含まれているの。

「愛？ 大地？ どこ？ ここにいるのは私だけ？」

私は拳銃を手を取った。大地はどうして拳銃を置いていったの？ その意味はわからない。でも、気づくと私は拳銃を上着のポケットに突っ込んでいた。拳銃はポケットにはおさまきりらなかったけど、それでもポケットが破れるほどに無理矢理押し込んだ。

私は物置から飛び出した。そして走った。土地勘なんて全然ないけど、とにかく家が沢山見える所へ向かって走った。

すぐに息があがる。心臓が破裂しそう。体がひんやりしてきた。足がガクガクふるえる。私は口で息をしながら、とにかく千歳の中心部へと走った。

ひたすらに走ると、千歳駅に着いた。朝だから人の数がとても多い。私は舌打ちをしながら札幌駅行きの電車を確認した。そして切符を買って改札を通る。電車はすぐに来た。急いでもしようがないのに、電車で飛び乗った。

「あ……」

まだ、大地は千歳にいるかもしれない。札幌に戻ったとは限らない。いや、もしかしたら全然知らない所に行ったのかも。

なんであいつ携帯持ってないのよ。嫌だよ。嫌だよ。一人で電車に乗りたくない。こわいよ。誰かに笑われちゃう。いじめられちゃう。殺されちゃう。

誰か、私の側にいてよ。

これからどうしよう。札幌に戻ってどうすればいいんだろう。大地を探すしかない。あいつは多分、札幌に帰っているに違いない。そうだ、そうだよ。絶対札幌に帰ってる。どうせ一人で遠くへなんて行けないんだから。

三十分乗って札幌駅についた。凄まじい人混みをかきわけて改札を出て、そして外に出た。

当たり前だけど、ただ人が行き交うだけで、何をすることも出来なかった。ぽつんと駅前に立って、呆然とする事しか出来ない。

どうしよう。何もなくなっちゃった。もう、私、何も出来ない。からっぽだ。

もう元の場所に戻るしかないのかな。でも、元の場所に戻るということは里奈たちとの一件が待っているということだ。

あの後、里奈はどうなったんだろう。死んだのかな。目を覚ましたのかな。皆、血眼になって私を捜してるのかな？

そうだ。私は思いついてコンビニへと向かった。

コンビニに入って、すぐに適当な新聞をつかんでみる。自分の求めている記事はどこにも載っていない。全国紙じゃダメだ！

北海道新聞を手にとってしらみつぶしに記事を探していく。

「やっぱり無いか……」

私は、もしかしたら自分のした事がニュースになっているかもしれないと思ったのだ。でも、まあ、さすがに新聞には載らないか。という事は、里奈は死んでいない。死んでいたらさすがに新聞の記事に載るだろうし。

少しホッとした。殺人者になんかなりたくない。でも、里奈を窓から突き落として逃げたという事実は変らない。

本当にどうしよう。これからは一人で何でもしなくちゃいけないんだ。

コンビニから出て、大通りの方へ、アテもなく歩いた。とにかく、どこかに座りたい。もう歩いているだけで辛くて死にそう。

「優菜！」

突然後ろから声をかけられた。なんか最近、よく知らない人に話しかけられるなあ。

振り向くと、そこにはセーラー服を着た女の子がいた。あれは旭岡中学の制服。

「……菜々実？」

「アンタ、こんな所で何してるのさ！」

長い髪を振り乱しながら私の所に駆け寄ってくる。菜々実は大きな瞳で私をじっと見つめた。

「アンタ、大変な事になってるよ。里奈を窓から突き落とした最低な野郎だって、佐々木達騒いでるよ」

「ふうん。で？」

「で？ ってアンタねえ……。先生達は必死になって優菜を探してる」

「私の友達は？」

「あ、うん。私もそうだけど、貴方の友達は皆優菜の味方だよ」

「え？」

「だって、里奈は愛をいじめて自殺まで追い込んだじゃない。あんなヤツ窓から落とされても文句言えないよ。それにね、あの日、アンタ里奈たちに絡まれてたんでしょ？ 優菜と里奈たちが放課後の教室で騒いでるの、見た人がいるんだ。大変だったね……」

菜々実はそう言うと、私の手を両手で握りしめた。

「ああ、もう。そんなに髪ボサボサになって。ねえ、学校に戻ろう。先生達は皆アンタを犯人呼ばわりしていきり立ってるけど、私もフォローするから。ね？」

「そっか。私、やっぱりそういう扱いなんだ」

「だ、だから皆は優菜の味方だってば。それに、私は愛がいじめられているのを止める事が出来なかった。だから、せめて優菜だけでも助けるよ」

「その気持ちは、凄く嬉しい。本当に嬉しいよ。でも、私が助かっても愛は助からないんだよ。愛の時間がダメだったから、せめて優菜だけでもって……。それで私が救われても愛は救われない」

「しよ、しょうがないよ。ねえ、今は自分の事を考えて。また、一緒に学校に行こう。そして、愛のやられた事を頑張って訴えよう」

「大人は、自分達に都合の悪いことは全て抹殺する。そういう世の中なんだよ」

なんだかおかしくなってきた、私は気づくと笑っていた。

いくら友達が味方してくれても、そんなの大人たちは鼻で笑うだけで何も聞いてはくれないし、自分達の立場を守るために教師という圧倒的な権力で私をつぶしにかかるはずだ。そして最後にはドラマで聞いたような綺麗事を並べて、私達を説得するんだ。まるで自分は神で私が懺悔する人かのように。

「ねえ優菜。とりあえず、もう逃げるのは止めようよ。アンタが逃げる必要がどこにあるの。逃げるべきは里奈たちだよ。あいつら人殺しなんだからさ、むしろ優菜が里奈たちを地獄の果てまで追い詰めるべきなんだよ」

「でも、学校はいじめは無かったって断言したじゃん。学校がそう言えば事実はそうなるんだよ。真実っていうのは実際に起きたことじゃなくて、力のある者が発言したことがそのまま真実になるんだよ。真実なんて、ほとんどが嘘なんだ」

「でも！ 優菜は逃げることはないんだよ。もっと胸張って、あいつらを告発しなきゃ。アンタ愛の親友でしょ。貴方が逃げて誰が愛を助けるの」

「……助ける？ 愛は死んだんだよ。今、私に何が出来るっていうの」

「生きてるとか死んでるとか関係ないでしょ。愛が生きていても死んでいても、優菜は永遠に愛と親友でしょ。今も優菜は愛と親友。だったら、諦めちゃダメだよ」

菜々実は私の髪の毛を手で優しく撫でると、乱れた髪を出来るだけ綺麗にまとめてくれた。そして自分の髪留めを外して私の前髪につけてくれた。

なんだか、泣けてくる。私、もう感情がおかしくなってる。こんなに素晴らしい友達がいるのに、なんで私は今まであんな事をしていたんだろう。でも、大地と出会えた事に後悔はしてい

ない。

私は友達との付き合いはうまく出来ていたんだ。ここまで心配してくれる友達がいたんだ。

でも、愛はない。大地もない。菜々実も、些細なきっかけで私を嫌いになって私を拒むかもしれない。大地だって、いきなり消えちゃった。

「今から学校行けなんか言わないけど……。とにかく家に帰りなよ。あ、それが嫌なら私の家に来る？ 他の友達呼んでさ。皆で話そうよ。なんなら、優菜は里奈の事が落ち着くまで私の家にいてもいいよ。私が友達と協力して、優菜は悪く無いって主張するし、愛がいじめられていた事実をもっと学校に訴える。それまで優菜は、私の家で過ごしてればいいよ」

私の体は熱くなって、涙がポロポロと出てきた。顔の筋肉が痛い。鼻水がどんどん出てくる。立っている事も出来なくて私はしゃがみこんだ。もう体に力が入らない。頭を地面に押しつけて、私はひたすらに顔から色んな液体を流し続けた。

「ゆ、優菜大丈夫？ そうだよ。辛かったんだよね。私には分からないくらいに辛かったんだよね」

周りに人が集まっているのに気がついた。急に恥ずかしさが私の心を支配した。

「ちょ、ちょっと見ないでよ！ あっち行って下さい！」

菜々実が必死にむらがる大人達にそう叫んだ。ちらっと上を見ると、私を覗き込んでいるのは好奇心をむき出しにしたおばさんや、暇そうなサラリーマン。

遠くに沢山高校生がいたけど、高校生達は一瞬私を不思議そうな顔で見ただけで全く気にせずに通り過ぎていった。

「あらあら。お嬢ちゃんどうしたの？ 迷子かな？」

おばさんが笑顔でそう言うと、菜々実は凄まじい剣幕でおばさんを睨んだ。そして、相手の心臓をえぐるくらい露骨にバカにした声で言った。

「はあ〜？ 迷子な訳ないでしょバカじゃないのこのクソババア！ 子供が困ってたらとりあえず迷子ですか？ この子中学生ですよ見てわかりませんか？ 中学生や高校生にいつまでも幼稚なイメージ植え付けないで下さい！ つーか話しかけるなめっちゃうざいんですけど！ 空気読んでよ。ほら行こう優菜」

菜々実私の腕を引っ張った。なんとか立ち上がって、群から脱出する。

「ほんつとに、大人は嫌だね。人が悲しんでいる所を見るのが好きなんだよ、あいつら。そのくせ良い人ぶって助けようとする。見た？ 今のあの笑顔。本当に心配してたら普通笑えないでしょ」

私は、もう、あまりにも嬉しすぎて、菜々実に恩を返すには一生かかっても無理なんじゃないかと思った。命を捧げてもまだ足りない。

最高に嬉しいから、最高に痛い。ここまでしてもらっているのに、私は何も出来ない。優しくされるのは嬉しいけど、本当に、悲しいんだ。

菜々実の優しさが嬉しすぎて、心臓も骨も肉も、全て砕けそう。

「ほら、私の家に行こうよ」

「え？ 菜々実、学校は？」

「いいよ学校なんて。とにかく私の家に行こう」

私は葉々実の家に連れて行かれた。両親はどちらもいなかった。

葉々実の部屋でぼーっと座っていると、葉々実はコップにりんごジュースをなみなみと入れて持ってきてくれた。

「ありがとう。何から何まで」

「何言ってるのさ。アンタは辛い目に合ってるんだから、遠慮する必要ないんだよ。私なんか愛のいじめを止められなくて、優菜がどこかに行っている間も何も出来なかったんだから。もう少し凶々しくしてもいいんだよ」

「ありがとう」

葉々実はジュースをごくごく飲むと、あぐらをくんで、テーブルに肘をつき身を乗り出して言った。

「で？ 優菜はどこに行ったの？」

「ちょっと千歳まで」

「はあ？」

「今日の朝まで千歳にいた」

「も、もしかして……だから札幌駅にいたの？」

「うん」

葉々実は一瞬固まったけど、すぐに甲高い声を上げて笑い出した。

「そりゃ見つからないわけだよ。千歳で何してたの？」

「特になにも」

「ふうん。それで、これからどうする？ しばらくは私の家において、私の妹として暮らしていてもいいけど」

「私は妹なの？」

「うん、私がお姉ちゃん」

葉々実はジュースをごくごく飲むと、私の着ていた服をたたんだ。

「あ、そうだ。知ってる？」

「何を？」

「里奈が窓から落ちた日、当然先生が里奈の所に駆けつけるじゃん？ で、これまた当然教室にも先生達やってきて、その時拳銃見つかったのよ」

「ああ……」

「里奈たちが拳銃持っていると噂で知った時、もう本当にアイツは狂ってると思った。優菜拳銃向けられたの？」

「うん」

「あ、ありえない！ 拳銃人に向けるなんて……。拳銃は合法だけど、未成年が使ったら犯罪になるのに。あんな人を殺す武器を同級生に向けるなんて普通じゃない」

「拳銃の事、先生達はどうしてる？」

「無かった事にしてる。大人って悲しい生き物だよな。いじめがあつたら隠蔽。生徒が拳銃持っ

ていたら隠蔽。いやあ、大変なあ」

「当然だよ。だってさ、いじめがありました！ ってハッキリ言ったらPTAを筆頭にここぞとばかりに叩かれて、校長は辞めろとか言われて、普通の教師だってそれからの日々が色々面倒になる。特に担任なんてノイローゼになっちゃう。拳銃なんかあったら、学校全体の教育の問題だとか騒がれて、マスコミに取り上げられて学校がパニックになるよ」

「確かにね。だからって、子供のトラブルを隠蔽して被害者の気持ちを葬るような事は正当化されないけどさ。つーか、大人ってすぐ教育の問題で騒ぎ出すよね」

「うん。教育の問題なんて本質的な所から外れすぎてるよ。根本的な問題はそんな事じゃないのに」

「そうだよな。……で、話がズレたけど、優菜これからどうする？」

「分からない。でも、学校には行きたくない。私は、もうまともな生活に戻れない。学校に戻ったら私は犯罪者扱い。愛の事は永遠に隠蔽され続けて真実は表に出ない。そして、里奈たちは被害者面して皆の同情をかって生きていくんだ」

「だから、そこは私も優菜と一緒に頑張るから」

「何言ってるの。優菜が私のフォローをしたら、貴方も周りから冷たい目で見られるよ。先生に嫌われたらどうするの？ あいつら、内心なんか平気で自分の好き勝手につけるよ？」

優菜は眉間に皺をよせながら唸った。

「皆で訴えればなんとか……」

「菜々実」

「え？」

「ありがとう」

「え、あ、うん」

「菜々実みたいな友達がいたって事だけで、私は報われるよ」

でも、綺麗事をいくら並べてもしょうがないんだ。もう、何にも潰されたくない。私は楽になりたい。体の力をすーっと抜いて、雲の上に寝転がって、そのまま永遠に眠り続けたい。

いくら菜々実が私の事を理解して心配してくれても、それは私の喜びだけで終わる。もう現実目を見たくない。こわいよ。学校に殺される気がして、私は鳥肌が立った。

書くしかないと思った。もう私に残された道は小説しかない。生きるためには書くしかない。これで愛の事を訴えることで生きる事が出来る。それが出来ないとしたら、私の死ぬ時だ。

「ねえ、パソコンかしてくれない？」

「別にいいけど。何か調べ物？」

「ちょっと、小説を書きたいんだ」

菜々実になら言ってもいいと思って、正直にそう言った。しかし、菜々実は一瞬戸惑った顔になった。

「しよ、小説？」

「うん。小説」

「あ、うん。いいよ。今準備するね」

そう言って菜々実はテーブルに置いてあるパソコンの電源をつけた。

「ネットは使う？」

「うーん。小説書くだけだから、大丈夫」

「そっか」

「菜々実、学校行った方がいいんじゃない？ いつまでも私に構ってても……」

「うーん。でも、優菜一人になっちゃう」

「悪いよ。これ以上してもらったら。パソコンまで使わせてもらって」

「そう？ じゃ、午後から学校行こうかな。里奈たちの情報も知りたいし」

「うん。本当にありがとう。今度何か奢るね」

私がそう言うと、菜々実は立ち上がって鞆を持つと、笑顔で言った。

「じゃ、今度学校帰りにコロポックル・コタンのパフェおごってね」

学校帰り、か……。

菜々実はドアを開けてふと立ち止まった。

「お風呂、入ってていいよ。女の子はいつでも髪はサラサラじゃないとね」

菜々実はドアを閉めた。

私は窓から菜々実が家から出たことを確認すると、一階に降りてお風呂場を見つけシャワーを浴びた。

学校に戻ってもいいかなって、思い始めた。でも耐えられるだろうか。里奈を窓から突き落としたとんでもない女子中学生。何をどう訴えても、もう通用しないかもしれない。

個性や素が許されない教室。戻りたくない。

大地はどこにいるんだろう。そうだ。探さないと。おかしいな。どうして菜々実に出会ってから、私は大地の事を忘れていたんだろう。

やっぱり頭がおかしくなっているのかな。大地の事が頭から離れるなんて。それとも菜々実と出会って正常になったのかな。いや、そんなわけない。

私は小説を書く手を止めた。どうもしっくりこない出来だけど、なんとか形にはなっている。文体は崩れていないし、描写も細かく書けた。

でも、なんだろう、この小説？ 読み返してみると、とても感情的でありながらとても内向的。意味がわからない。

ダメだ。私このままじゃダメだ。

私は中学生だ。中学生なんだよ。このままじゃダメだ。ここでの生活は間違ってた。大地との生活はただの現実逃避だ。

現実逃避するくらいなら死んだ方が良い。

私は戻る。戻らなきゃダメだ。私は本当の学校に戻るんだ。

でもダメだ。私一人が学校に戻っても意味がない。大地を探さないと。

私達はまだ普通の道を歩けるはず。私だけ元の場所に戻るなんて許されない。私達は永遠に離れちゃいけないものだと思う。

私はそっと部屋から出た。家には誰もいない。静かに家を出た。あ、鍵かけなくて大丈夫かな？

そう思ってポストの中を見たら、鍵が入っていた。鍵をかけて私は走り出した。大地。戻ってきているとしたら、あそこにいるはず。

でも、この時私は一つの事を思いだしていた。

そういえば。今日は……。

私は立ち止まった。自分の髪の毛を触ってみる。大地の舌の感触がまだ残っているみたい。そして小説という言葉を見た時の大地と菜々実の表情。

小説。そうだ、小説。大地を探す前に、私は確認しなきゃいけないことがある。

私は、自分の家へと走った。

数十分走って、私は自分の家まで行った。鍵は閉まっていた。しょうがなく私は家の裏に回り込んで台所の窓を開ける。そして窓枠に両手をおいてなんとか流し台の上に着地した。久しぶりの我が家。ただいま帰りました。

流し台から降りて、誰かいないか探す。と言っても当然誰もいない。私と母親の二人暮しで、鍵がかかっているということは無人に決まっている。

リビングに行くと、テーブルの上に雑誌やCDが散乱していて、床には化粧道具が転がって

いる。脱ぎ捨てたままの服もあちこちに落ちていて、下着までもがソファに置いたままだった。こんな女にはなりたくない。

私は二階に上がって自分の部屋に入った。机や座椅子や扇風機が、一ミリも動いていない状態のまま、そこにあった。なんだか全てがとても無意味なものに見えてくる。

ベッドもコンポも、全てがどうでもいい。ただ、大きな本棚に入っている小説だけが輝いて見える。

机の上に置いてあるノートパソコンの電源をつけた。そして立ち上がるまでの間、私は床に置いてある化粧ポーチから口紅を取り出して、唇にぬってみた。そういえば、大地といくら唇を合わせても、ただあの人の唇には唾液がついているだけで、紅く染まることはなかった。

手鏡で自分をうつす。丸い顔。大きな瞳は自慢。薄い唇。

アイシャドーを薄く塗り終わると、大きく息を吐いた。ずっと忘れていた。かなり前に応募した小説の新人賞の最終選考の結果が、今日発表されるのだ。

応募したのは半年くらい前。それからは愛が死に、私はこんな事になっていた。あの小説を応募した時は、まさか自分がこんな状況になっているなんて思いもしなかった。ただ、もがきながら生きていだけで他の事を考える余裕がなかった。

いや、多分、落ちていたらどうしようという不安と、最終選考に落ちて悲しむようなことになりたくなくて、逃げていたのかもしれない。

一次選考は結構前に発表されて、私は十六人の中に残っていた。一次選考が発表されたとき、まだ愛は生きていた。一次選考に残ったことを愛に話したとき、あの子は自分のことのように喜んでいた。

「ねえ愛！ 私の書いた小説、一次選考に残ったんだよ」

私がそう言うと、愛は私を抱きしめた。

「凄いね凄いね優菜ちゃん。サインちょうだい！」

「まだ一次選考だよ。自慢にもならない」

「でも、一次選考に残るなんて普通無理だよ。しかもまだ中学生だよ。凄いよ。もっと喜んでもいいんじゃない？」

「ダメよ。一次選考ごときで興奮するような人は、甘いんだよ」

「そっか。このまま大賞までいっちゃうかな？」

「そればかりは、選考委員の人しかわからないからなあ」

愛はキラキラした瞳で私をじっと見つめた。

「まだ中学生だから、時間は沢山あるもんね。いっぱい小説書けるもんね。私にも見せてね」

「うん、いいよ。見せてあげる」

「ありがとう。でも本当に楽しみだなあ。受賞したらパーティ開こうね。奈々実とかも呼んで」

「大げさだなあ。あのね、本当に夢を叶える気にいるんなら、デビュー出来ても、デビューすることが当たり前くらいの気持ちじゃないとダメなの。夢が叶った時に、信じられない気持ちとか、まだ夢を見ているようですとか、嬉しすぎて何もいえませんとか言う人いるでしょ？ それじゃダメ。夢を叶える気持ちを本当に持っているのなら、むしろデビューした後のことも考えてお

かないと。素人のうちからプロ意識を持ってやるんだよ」

「そっか。優菜はよく考えてるんだね。じゃあ、今から記者会見の受け答え練習しておこうよ！」

「愛」

「うん？」

「それはさすがに早すぎるわ」

「そうかな。でもでも、そういうのをイメージするのは悪く無いと思う。ねえ優菜。マジ応援してるからね」

「うん、ありがとう」

私はつい、一人でニヤけていた。愛。戻ってきなよ。私の小説、見せてあげるよ。奈々実は私の味方だったよ。私達の味方をしてくれる人はいるんだよ。

ねえ、愛。希望が見えたよ。大丈夫。この世の中そんなに悪いもんじゃない。私達は友達がいればそれで生きていけるかもしれない。世の中がどうであろうと周りの人間がどうであろうと、関係ないよ。ただ、大事な友達が少しでもいればそれで人生を歩むことが出来るんだよ。

奈々実は私と愛をしっかりと見ているよ。大切な友達が、ちゃんというよ。

私は震える手でマウスを動かし出版社のサイトを開いた。新人賞のページに移動する。予想通り最終選考の結果が公開されていた。

「え！」

私は、数分、固まった。頭の中は真っ白。

しばらくして落ち着くと、無駄だと思うことや忘れたい過去を全て容認できる気持ちになった気がした。

「つ、伝えなきゃ！」

早く。早く行かなきゃ。彼に伝えないと。一秒でも早く。

大通り駅まで行って、東西線に乗って大谷地駅まで行く。そして自分でも驚くほどのスピードで、あの小屋まで走った。

ついにやったんだよ。私、大人になれるよ。愛、大地。ねえ、どこ？ 私を見てよ。私の話を聞いて。

森に入って小屋の目の前まで来た。なんだか数年ぶりに来たような気がした。そして小屋の中に入ってみると、中はガランとしていた。やっぱり何もかも回収されている。

ねえ大地。一緒に戻ろう。だって私達何も始めてないんだもん。ちょっと遠回したかもしれないけど、私達は普通になれるはず。

まっとうな道からドロップアウトするには、私達はまだ若すぎる。

「大地！ 大地！ ねえ、私ね、私ね。やったよ。あのね」

でも大地はいない。戻ってきてないの？ どこに行っちゃったの？ もしかして愛と同じ所に行っちゃったの？ そんなわけないよね。

「大地。ねえ、どこ？」

どこにいるの。大地。この私の気持ち、聞いてくれないの？

小屋の外に出てみたけど、やっぱり大地はいない。

どこ？ 皆どこ？ ねえ、私、普通になれるよ。小説を書けるんだよ。

一瞬、里奈たちの顔が頭に浮かんだ。その瞬間私の心臓は爆発しそうになった。

「あはっ。愛、私ね、やったんだ。愛が応援してくれたから。そうだ、大地って人と出会ったんだよ。それでね、それでね、私ね」

私は気づくと、上着のポケットから拳銃をとりだしていた。

誰もいない。誰かがいないと私は学校に戻れない。一人はイヤ。私は気づいちゃいけないことに気づいてしまった。

「私、私。やったよ。ねえ、愛。やったんだよ？」

私は座り込んだ。

「愛、大地。私、頑張ったんだよ。ねえ、頑張ったんだよ」

しばらく、私は固まっていた。頭の中に、窓から落ちていく里奈の姿がよみがえる。愛のお葬式。大地の置手紙。

「ねえ、なんで誰もいないの。誰かいないの？ ねえ！」

銃口をこめかみにあてる。腕がぷるぷると震える。

生きなきゃダメ。生きて大人にならないと……。

私は左手で引き金を引いた。